

ビザンティン典礼における聖体礼儀の諸相とその神学
聖バジル、聖グレゴリオス、聖クリュソストモスの典礼
秋山 学

序 .

洋の東西を問わず、また時代を越えて、人々が真に集いあえる普遍的な場を設けることは可能であろうか。また、生命活動の一現象としての学問的研究、特に過去現在の文化に関わる人文科学全般を賦活化する上での、真の基礎を定めることは可能であろうか¹。

ビザンティン典礼は、東洋の西端部である東地中海域を故地とし、現在ではギリシア・スラブ圏で広く執り行われている。ユダヤ教の典礼を受け継ぐ初期キリスト教の典礼を母胎とし、現行のローマ典礼その他に比して、初代教会の神学や典礼の次第を理解する上で益するところが大きい。筆者は古典古代学と宗教性の関係を探るためにハンガリーを在外研究の場所として定め、当地でビザンティン典礼を経験した²。そこで実感しえたのは、初代教会の神学を受け継ぐこのビザンティン典礼こそ、西方の典礼よりも源流に遡って真に普遍的な救いの構造を蔵したものであるということであった。このようなビザンティン典礼学上の成果としては、このうち晩課と朝課についてすでに公にしたが³、本稿では典礼のなかで頂点に位置づけられる聖体礼儀の次第について翻刻を行い、このテキストに基づいて考察したいと考える。

ビザンティン典礼に従う教会の典礼文として、一年を通じて用いられ最もよく知られているものは、「聖ヨアンネス・クリュソストモス典礼」である。ギリシア教父ヨアンネス・クリュソストモス(「金口のヨハネ」; 344 - 407)はコンスタンティノポリスの総大司教であるが、典礼文の字句が彼自身に遡ることはなく、おそらく9世紀頃に確立されたものと思われる。それに対し、年間計10回に限って行われる「聖バジル典礼」は、同じくギリシア教父の大バシレイオス(330 - 379; 本稿では短く「バジル」と呼ぶ)に遡るものと考えられている(他に四旬節中に行われる「先備聖体礼儀」、すなわち教皇聖グレゴリオスの典礼がある)。バジル典礼とクリュソストモス典礼の相互関係は「元来、聖使徒ヤコブが典礼を組み立てた。これに基づいて聖大バジルが記し、次いで金口の聖ヨハネが短縮した」と言われる⁴。したがって、クリュソストモス典礼文の中に金口の聖ヨハネ自身の筆致による部分を探しても見当たらないものと想定されるが、聖バジル典礼のうちに聖大バジル自身の言葉を求めることには妥当性がある。もっとも、クリュソストモス典礼もバジル典礼も、会衆側からすれば外見的にはほとんど差がなく、またバジル典礼では長大な奉献文をはじめ司祭の黙唱部がかなり長いという点が特徴的ではあるものの、霊性の上で両者は同質であると言える。このような理由から、本稿では聖バジル典礼を基本テキストとして措定するが、これはその歴史性を重視するがゆえに他ならない。バジル典礼は、バジルその人が古代修道制の父とされ、また聖バジル修道会は現在、実質的に東方典礼唯一の修道会であるために、修道制の研究にも視界を拓き⁵、また歴史性が確保されることで、実弟であ

¹ 本稿と対象は異なるものの、同様の問題意識から執筆されたものとして、拙稿「慈雲『南海寄帰内法伝解纜鈔』の現代的意義 「動詞語根からの古典古代学」に向けて」(本報告書第3章)を参照。

² その次第は「2005年度 筑波大学国際連携プロジェクト(長期派遣)報告書「ハンガリーにおける古代学の展開と宗教性の関係をめぐる研究」」筑波大学国際連携室 HP <http://khki11.sec.tsukuba.ac.jp/ilo/pro17long.htm>, 2006.1で報告した。

³ 拙稿「ビザンティン典礼における「テュピコン」の神学 修道院典礼から司教区の典礼へ」(筑波大学大学院人文社会科学研究所人文・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』53, 53 - 105頁, 2008年)。

⁴ Kisfalsi János, *Ismerd meg Arányszájú Szent János Liturgiáját*, Viszló 1999, 3. o.

⁵ 聖バジル修道会に関しては, Dudás Bertalan / Legeza László / Szacsy Péter (szerk.), *Baziliták*, Budapest 1993 および Keresztes Sarolta Bazilia, OSBM, *Szerzetességünkéről*, Máriapócs 1996 を参照。

るニュッサのグレゴリオス(335-394)の研究などにも寄与するだろう⁶。

バジル典礼が行われる年間の計10回とは、降誕祭前晩、主の公現前晩、受難節中の5度の日曜日、聖週間中の聖木曜日と聖土曜日の晩、それに1月1日聖バジルの祝日である⁷。このうち降誕祭、公現祭、聖木曜日、聖土曜日の晩におこなわれる典礼は、いずれも前半部に当日の晩課が置かれ、これとドッキングした形で後半部に聖バジル典礼が接続されるものである。したがって冒頭より完全にバジル典礼で聖体礼儀が行われるのは、1月1日と四旬節中の5度の主日のみである。本稿では「奉献礼儀」に始まる「聖体礼儀」の全容を提示する目的をも併せ鑑みることから、1月1日の場合をサンプルとして取り上げる。ちなみに、筆者がこの聖バジル典礼に与ったのは2006年の元旦、ニージェハーザの司教座聖堂にてであったが、この2006年1月1日は日曜日であった。しかし通常の日曜日に行われるクリュソストモス典礼ではなく、この日には聖人の記念が優先してバジル典礼が執り行われるのである。

本稿はこの「序」に続き、第1節と第2節より成る。第1節ではまず1)で、バジルに由来する「聖バジル典礼」の典文を翻刻する⁸。ビザンティン典礼の聖体礼儀は第一部「奉献礼儀」第二部「求道者礼儀」第三部「信徒礼儀」の三部より成る。聖体礼儀を構成する3つの部分は、それぞれ象徴的に「キリストの公生活」「宣教の時期」「受難・死・復活・昇天」を表現する。また理念的には、各々人間の「日常(時間)」「言葉」「生命」を聖化する働きを持ち、究極的にキリストによる復活、すなわち死への勝利を寿ぐ構造になっている。「求道者」とは非信徒の意味であり、第二部は、彼らを含めた全人類に「御言葉」としての福音が告げられたことを記念する。以前はこの第二部から「神秘の宴」を伝える第三部に移行する際に、非信徒に退出が求められた。現在ではそのようなことはなく、また典文中に見られるその指示も読まれることはないが、全体の構造は旧来のまま継承されているため、本稿ではこのような部分についても忠実に起こすものとする。そして「使徒信条」(「信仰宣言」に相当)は、第三部「信者礼儀」において唱和される。この点はローマ典礼が、第一部を「ことばの祭儀」、第二部を「感謝の典礼」としてビザンティン典礼と共有する面を有しながらも、使徒信条が「ことば」のレベルで捉えられて前半に収められ、その末部で唱和されるのと異なる理解に立つものだとと言える⁹。

つづく第1節の2)および3)では、それぞれ四旬節中に特有な「先備聖体礼儀」、および聖体礼儀式として一般的な「聖クリュソストモス典礼」を翻刻する。これらに続く第2節では、聖バジル典礼のアナフォラ部を出発点として、この典文に含まれている聖体をめぐる神学を、終末論との関連で考察する。これらの問題は、同典文における「第1部 奉献礼儀」にも連動するため、これをあわせ考察する。そしてこの「聖バジル典礼」が、特に新約聖書における「最後の晩餐」や「聖霊降臨」の記事、あるいは聖体論全般をどのような形で総括・止揚し、典礼文として結晶させているのかを検証する。

以下テキストとしては、アナフォラ部に関してギリシア語原文とハンガリー語訳を併載した

⁶ 拙稿「聖バジル典礼における奉献文の神学的地平 ニュッサのグレゴリオス『人間創造論』解釈に向けて」(『エイコーン 東方キリスト教研究』第34号44-64頁, 新世社, 2006年)を参照。本稿ではこれを「旧稿」と呼ぶことにする。

⁷ 拙稿「ビザンティンの典礼暦と「光の週」」(『地中海学会月報』310号p.5, 2008.5)を参照。

⁸ 前掲注(6)に挙げた旧稿の中で、筆者は聖バジル典礼の典文の一部を翻刻した。この際には、典文はアナフォラからエピクレシスの部分まで、すなわち「使徒信条」が終わった後よりディプテュコス「聖人記憶」の前までを掲載した。今回は聖バジル典礼全体の構造説明をも兼ねるため、開祭部の「奉献礼儀」(これはヨアンネス・クリュソストモス典礼と同様である)から「求道者礼儀」そして「信徒礼儀」までのすべてを翻刻することにした。

⁹ この点については、すでに拙稿「「中欧」によみがえるビザンティンの世界観」(『創文』no.467, pp.1-5, 2004.8)で考察した。

Liturgikon : A görög szertartású katolikus egyház szent és isteni liturgiája, Nyíregyháza 1723/1920 を用いる。そして「第1部 奉献礼儀」については同書 100 - 108 頁を、第2部「求道者礼儀」および第3部「信徒礼儀」については同書 217 - 272 頁を底本とする。全体にわたり、ブライトマンによるギリシア語テキスト (F.E. Brightman, *Liturgies Eastern and Western, vol. 1, Eastern Liturgies*, Oxford 1896, 309 - 344 ; 400 - 411) を随時参照する。もっとも本稿では一貫して、典礼とは「古典古代以来の伝承の、生きた形での現代における継承」とであると認識する。したがって、最終的には現行の典礼式次第を考慮し、ハンガリー語テキストを重んずるという立場を貫く。これは、文献学も靈性に裏づけられてこそ意味を持つ、との見解を反映した姿勢である。

クリュソストモス典礼には、クハレクによる詳細な一巻本の注解書 (C. Kucharek, *The Byzantine-Slav Liturgy of St. John Chrysostom*, 1971), タフトによる分冊形式による未完の数巻本注解書 (R. Taft, *A History of the Liturgy of St. John Chrysostom, vol. II The Great Entrance*, 1978; *vol. IV The Diptychs*, 1991; *vol. V The Communion Rites*, 2000), イヴァンチョーによる典礼総説書 (Ivancsó István, *Görög katolikus szertartástan*, Nyíregyháza 2000), キシュファルシによる簡便なもの (Kisfalsi János, *Ismerd meg Arányszájú Szent János Liturgiáját*, Viszló 1999) などがあり、本稿ではバジル典礼との共通部等に関して適宜これらを参照し、また *Liturgikus Lexikon* (Verbényi István (szerk.), Budapest 2001, kül. 192.o.) をも考慮した。

第1節 ビザンティン典礼における聖体礼儀の諸相

1) 聖バジル典礼 (1月1日)

1. 「奉献礼儀」

この第1部は、あ．聖堂への入堂 い．着衣 う．奉納物の準備 え．奉献 に分かれる。詳細としては 1) イコノスタシスの前での祈り 2) 奉献のための着衣 3) 洗手 4) 小羊の準備 5) ぶどう酒と水の注ぎ 6) 聖母の記憶 7) 勝利する教会の記憶 8) 闘い苦しむ教会の記憶 9) 香振り 10) 奉献物の覆い に分けることができる。

あ．聖堂への入堂

1) イコノスタシスの前での祈り

司祭は聖なる奉神礼を執り行う際には、聖堂に入り王門の前に立ち、三度礼をして静かに祈る

「われらの神は永遠に祝せられる、今もいつも世々とこしえに。アーメン。天の王、慰め主、真理の霊、すべてに遍在し万物を満たす方、あらゆる善の泉、生命の与え主、来たりてわれらのうちに住みたまえ。われらをあらゆる穢れから清めたまえ。善き方よ、われらの霊を救いたまえ」。「聖なる神、聖なる力、聖なる不死なる者よ、われらを憐れみたまえ (×3)。栄光は父と子と聖霊に、今もいつも世々とこしえに。アーメン。聖三位一体よ、われらを憐れみたまえ。われらの主よ、われらを罪から清めたまえ。創造主よ、われらの罪を赦したまえ。聖なる者よ、われらを顧み、あなたの名によってわれらの病を癒したまえ。主よ、憐れみたまえ (×3)」。「栄光は父と子と聖霊に。今もいつも世々とこしえに。アーメン」。「主の祈り (マタイ六九 - 13): 天におられるわれらの父よ、あなたの名が聖とされんことを。御国の来たらんことを。御旨の天に行わるとく、地にも行われんことを。われらの日ごとの糧を、きょう与えたまえ。われら人を赦したるがごとく、われらの罪を赦したまえ、われらを試みに引きたまうことなかれ。われらを悪より救いたまえ」。「国と力と栄光は、父と子と聖霊よ、あなたのもの、今もいつも世々とこしえに。アーメン」。

その後こう述べる

「主よわれらを憐れみたまえ。われらを憐れみたまえ。われらの言葉はわれらの赦しには届かず、この嘆願を、われらあなたの罪深きしもべは、治め主なるあなたに捧げる。われらを憐れみたまえ。栄光は父と子と聖霊に。主よわれらを憐れみたまえ。われらはあなたを信頼する。われらに怒りたもうな、またわれらの罪を想い起こしたもうな。むしろ今も、恵み深き方としてわれらを見そなわしたま

え．われらを敵より救いたまえ．あなたはわれらの神，われらはあなたの民，皆あなたの御手の業，われらはあなたの名を助けに呼び求める．今もいつも世々としえに．アーメン．祝された神の母なるおとめよ，憐れみの扉をわれらに開きたまえ．われら，あなたに希望を置く者が，道に迷わぬように．むしろあなたによりわれらが災いから解放されるように．あなたはキリストを信ずる者の救いなれば」．

贖い主のイコンに向かい，

「善き方よ，あなたの聖なるイコンの前にわれらは膝を屈める，われらの罪への赦しを求めて．われらの神なるキリストよ．あなたは，創られた者たちを敵の桎梏から解放するため，自ら肉をもって十字架に昇ることを受諾された．われらはあなたに向かって感謝のうちにこう叫ぶ．<われらの救い主よ，世を救うために来たりて，すべての者を喜びで満たしたまえ>と」．

神の母のイコンに向かい，

「憐れみの泉なる神の母よ，われらをあなたの恵みに適うものとさせたまえ．あなたの罪深き民を顧みたまえ．いつものごとく，あなたの力を頼りたまえ．われらはあなたに信頼し，こう叫ぶ，<祝された方よ！>．かつて天使たちの長，ガーボルが叫んだように」．

頭を垂れて

「主よ，あなたの聖なる住まいなるいと高きところより，あなたの手を遣わしたまえ．わたしを力づけて，この務めに適うものとさせたまえ．裁きを受けることなく，あなたの畏るべき祭壇の前に立ち，血を流さぬこの奉献を執り行うことができるように．力は世々としえにあなたのもの，アーメン」．

至聖所に入るとき

「神よ，わたしを罪から浄め，憐れみたまえ」．

い．着衣

2) 奉献のための着衣

聖堂での衣服に着替え始める際に

「われらの神は永遠に祝せられんことを，今もいつも世々としえに．アーメン」．

アミクト・肩布を付けつつ¹⁰

「わたしは，打とうとする者にわが体を，ひげを抜こうとする者に頬を差し出した．わたしを罵りわたしに唾を浴びせようとする者らから顔を背けなかった」(イザヤ 50.6)．

スティハリオン・短白衣を付けつつ

「わが霊よ，わが神にあって喜べ．主は救いの衣をわたしに着せ，真理の衣でわたしを包んだ．冠で花婿を飾り，花嫁をベールで装うかのように」(イザヤ 61.10)．

帯紐を巻きつつ

「神は祝せられる，神はわたしに力を帯びさせ，わが道を咎めなきものとし，わが両足を鹿の脚のようにし，私を高きところに立たせる」(詩篇 17.33 - 34)．

エピトラキリオン・ストラを祝し，接吻して身に付けながら

「神は祝せられる．神は恩寵を自らの祭司に注いだ．頭に油を，その油は髭に滴り，アーロンの髭に滴り，さらにその衣の縁にまで滴り落ちる」(詩篇 132.2)．

右の腕紐を身に付けながら

「主よ，あなたの右の手は力を帯びて高く挙がる．主よ，あなたの右の手は敵を打ち破る」(出エジプト 15.6)．

左の腕紐を身に付けつつ

「あなたの手はわたしを創り，わたしを立てた．あなたの教えを学べるように，わたしに知性を与えたまえ」(詩篇 118.73)．

¹⁰ ビザンティン典礼固有の祭具等をめぐる簡潔な解説については Ivancsó István, *Görög katolikus liturgikus kislexikon*, Nyíregyháza 2001 がよい．

最後にフェロニオンをかぶりながら

「あなたの祭司たちは真理のために装い、あなたの聖なる者たちは喜べ、永遠に、今もいつも世々とこしえに・アーメン」(詩篇 131.9).

その後奉献台に赴き

「神よ、罪人なるわたしに憐れみ深くあらせたまえ」.

3) 洗手

手を洗いつつ

「わたしはわが手を潔さで洗う。そして主よ、あなたの祭壇を身にまとう。誉れの言葉に耳を傾け、すべての奇跡を語るために。主よ、わたしはあなたの家の麗しさ、あなたの栄光の住まいを愛する。神よ、わが霊を、神を知らぬ者どもに委ねたもうな。わが生命を、血に渴く若者ら、その手に悪を携え、その右の手が贈賄に満ちる者どもに渡したもうな。わたしは潔さのうちに歩む。わたしを救い、わたしを憐れみたまえ。わが脚はよるめくことなく立ち、主よ、わたしは集いの場であなたを祝す」(詩篇 25.6 - 12).

聖具を整えつつ

「あなたは自らの貴い血で律法の呪いからわれらを贖われた。十字架に釘付けにされ槍で貫かれて、人類のために不死性を注がれた。われらの救い主よ、あなたに栄光」.

う。奉納物の準備

1, 2, 3, 4, 5 番目の聖パンから、それぞれ「小羊」という立方体の小片、神の母を記憶する小片、諸聖人を記憶する9個の小片、生者を記憶する小片、死者を記憶する小片を切り取る

4) 小羊の準備

自らに十字を切りつつ

「われらの神は永遠に祝せられる、今もいつも世々とこしえに・アーメン」

左手に聖パン(プロスフォラ)を取り、右手に「槍」をもって、その槍で聖パンの表面に三度十字の印をし、そのたびにこう述べる

「われらの主、われらの神にしてわれらの救い主、イエス・キリストの記憶のため」

聖パンの表に付された十字の焼印(IC XC NI KA)の右側を槍で切り分けながら

「彼は小羊のごとくに屠り場に引かれてゆく」(イザヤ 53.7 - 8).

次いで左側を

「彼は咎なき小羊のごとくに、屠る者の前で物も言わず、口も開かない」

印の上部分を

「彼は卑しめられ、正しき裁きも拒まれる」

印の下部分を

「彼の子孫について誰が語りえよう」

底面を切り分けつつ

「彼の生命は地上から取り去られる」(使徒行録 8.32 - 33).

表面の十字の焼印が底になるようディスコス(聖体盆)に載せ、表側を十字に切りつつ

「世の罪を除く神の小羊は、世の生命と救いのため、生贄とされる」(ヨハネ 1.29).

再度聖パンの表底を返し、十字架の右上側、すなわちIC XC NI KAの焼印のうちICの部分にひと突きして¹¹

「兵士の一人が槍で彼のわき腹を開いた」.

5) ぶどう酒と水の注ぎ

ぶどう酒を祝福し聖杯に注ぎつつ

¹¹ このあたりについては、C. Kucharek, *The Byzantine-Slav Liturgy of St. John Chrysostom*, 1971, 262 - 272 を参照して説明を補った。

「すると直ちにそこから、血と」

水を祝福し聖杯に注ぎつつ

「水が流れ出た。これを見た者がこのことを証ししており、その証しは真実である」(ヨハネ 19・34 - 35)。

6) 聖母の記憶

聖パンから一部を切り分け、聖母の記念のために

「われらのいとも祝されし王妃、神の母、常世におとめなるマリアの崇敬と記念のために、彼女のとりなしによりて、われらの主よ、この奉納を天の聖なるあなたの祭壇に受け入れたまえ」。

この一片を聖化された「小羊」の右側に置き、こう述べる

「王妃はあなたの右側に、金の衣をまとい、多色の宝石を身に付けて立つ」(詩篇 44.10)。

7) 勝利する教会の記憶

聖化された小羊の左側に九つの部分の一つずつ、次のような一連の祈りにあわせて置きながら

「尊く生命を与える十字架の力によりて」

「崇敬にかなう、無形の天の諸力に」

「浄らかにして誉れある預言者、先駆者にして洗礼者ヨハネに」

「聖にして名高く、あらゆる榮譽にかなうペトロとパウロ、その他の聖なる使徒たちに」

「聖なるわれらの師父たち、全教会の偉大なる師たちと司教たちに：大バジル、神学者グレゴリオス、金口のヨハネ、アタナシオスとキュリロス、ミュラの司教ニコラオス、すべての聖なる司教たちに」

「聖なるステファノス、使徒にして最初の殉教者、首助祭、ゲオルギオス、デメテル、テオドロス大殉教者、そしてすべての聖なる殉教者に」

「聖なる生涯を送り、神の息吹を受けたわれらの師父たち：アントニオス、エウティミオス、サバスそしてオヌフリオス、さらにすべての聖なる生涯を送りし父母に」

「聖なる奉仕の医師たち：コズマスとダミアノス、キルスとヨハネ、パンタレイモンとヘルモラオス、及びすべての聖なる奉仕医に」

「聖にして真なる父祖たち：ヨアキムとアンナ、聖～(当日の聖人)、そしてすべての聖人たちに。彼らの祈りを通して神がわれらを顧みたもうように」

8) 闘い苦しむ教会の記憶

今度は生ける者たちのために切り分けた部分を置く

「聖性に満つ教皇～のために」

「真なる信もつわれらの使徒なる王～のために」

「神を愛するわれらの司教～のために」

「主なるイエス・キリストよ、この奉納を受け入れたまえ、あなたの僕～の罪の赦しのために」

死せる者たちのために切り分けた部分を置きながら、最近亡くなった教皇、王、教区司教たちを思い起こし

「主よ、亡くなったあなたの僕～の霊を記憶に留めたまえ」

「亡くなったあなたの僕の幸いな記憶とその罪の赦しのために」

最後に

「人を愛する主よ、復活と永遠の生命、そしてあなたとの一致の希望のうちに亡くなった、すべての真なる信もつわれらの父祖と兄弟たちを記憶に留めたまえ」

一番下部に自ら自身のために切り分けた部分を置き

「主よ、あなたの大いなる憐れみによりて、この務めに適わぬわたくしを記憶に留めたまえ。そして意図してのあるいは意図せざるわがすべての過ちを赦したまえ」

9) 香振り

香を香炉に入れ

「神なるキリスト、われらはあなたに、知の善き芳香として香を献ずる。これを天なるあなたの祭壇

に受け入れ、代わりとしてわれらにあなたの聖なる霊の恵みを遣わしたまえ」

チツラグ(星)をディスコスにかぶせ

「すると星が先立って進み、ついに幼子の場所の上に留まった」(マタイ 2.9).

え．奉献

10) 奉献物の覆い

小覆いで聖杯を覆いながら

「主は王、宝石の衣に身を包む．主は力を帯び、自らを守る．彼は大地の回転を確かなものとし、それは揺るがない．始めよりあなたの玉座は礎を保ち、あなたは永遠の存在．主よ、河は高まり、河は高く言葉を発する．河は波しぶきを上げる．水はうねりを成し、海は恐るべき渦となろうとも、主はいと高きところにあつてさらに畏るべき方．あなたの証しは真に信ずべきもの、主よ、聖性はあなたの家にこそ相応しい、世々としえに」(詩篇 92).

聖杯にディスコスを奉納物ともどもあわせ、中覆いで覆いながら

「キリストよ、あなたの栄光は天を覆い、地はあなたへの讚美に満ちている」(ハバクク 3.3).

大覆いをかぶせながら

「われらをあなたの翼の陰で守り、われらからすべての敵と抗する者を払いたまえ．われらの主よ、平安なる生命をわれらに与えたまえ．われらを憐れみ、われらの霊を照らし、救いたまえ．善き方にして人を愛する方なれば」

香炉を取り、奉納物に香を振りながら

「われらの神は祝される．その喜びはいまここに満ち．永遠の昔より、今もいつも世々としえに．アーメン」.

その後

「奉献した浄き奉納物のために、主に祈ろう」(応唱：「主よ憐れみたまえ」)

祈り：

「神よ、われらの神よ．あなたは天のパン、われらの主にして神なるイエス・キリスト、贖い主にして恵みの主を送られた．全世界を育み、われらを祝し聖化するために．われらの主よ、どうかあなたの御前に置かれたこの捧げ物を自ら祝福し、天の祭壇に受け取りたまえ．善き方にして人を愛する方なれば、この捧げ物を奉献した持ち来た者たちを記憶に留めたまえ．そしてわれらを守り、裁きを受けることなくあなたの神秘のためなる聖なる務めを果たさせたまえ．あなたのいと敬愛すべき高き名は、聖にして誉れあるもの、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに．アーメン」.

その後

「あなたに栄光あれ、われらの神なるキリスト、われらの希望よ、あなたに栄光あれ」.

応唱：

「栄光は父と子と聖霊に．今もいつも世々としえに．アーメン．主よ憐れみたまえ(×3)．主よ祝福を与えたまえ」.

閉句(その祝日・日に適うもの): 主日には

「死者たちの中から復活したキリスト、真なるわれらの神よ、いと聖なる母、聖にして栄光に満ちすべてを越えて誉れある使徒たち、聖なる大バジル、カッパドキアのカエサリアの司教、聖にして神の息吹を受けたわれらの師父たち、そしてすべての聖人のとりなしを通じて、善意に満ち人を愛する方として、われらを憐れみ救いたまえ」.

週日には

「われらの真なる神キリストよ...」

祝日にはそれぞれに定められた閉句を用いる．

奉納物と祭壇に香を振りながら

「墓にあつては肉を取り、黄泉においては神として霊となり、楽園では罪人とともに、玉座にあつて

は父と聖霊とともに、キリストよ、あなたはすべてを満たしつつ、束縛を脱してその様を変えられる」

2. 「求道者礼儀」

至聖所から出ながら聖イコンと聖堂全体に香を振り、その間に詩篇50篇を唱える。

司祭と助祭は祭壇の前に進み出て、崇敬の思いをこめて拝礼する。司祭は十字を切りつつ、静かに祈る

「われらの神は永遠に祝せられんことを、今もいつも世々としえに。アーメン」。

「天の王、慰め主、真理の霊、すべてに遍在し万物を満たす方、あらゆる善の泉、生命の与え主、来たりてわれらのうちに住みたまえ。われらをあらゆる穢れから清めたまえ。善き方よ、われらの霊を救いたまえ」。

司祭は改めて助祭とともに十字を切り、こう述べる

「栄光はいと高きところにいます神にあれ、地には平和、人々には善き思いのあらんことを」(×2)。

「主よ、わが唇を開きたまえ。わが口はあなたの栄誉を語り告げよう」(詩篇 50.17)。

司祭と助祭は祭壇と十字架に接吻する。その後助祭は静かに司祭に告げる

「見よ、われらは主に仕える。主よ祝福を与えたまえ」。

司祭「われらの神が永遠に祝せられんことを、今もいつも世々としえに。アーメン」。

助祭「主よ、わがために祈りたまえ」

司祭「主があなたの歩みを導きたもうように」

助祭「主よ、わたしを記憶に留めたまえ」

司祭「主なる神があなたを、御国において記憶に留めたもうように。永遠に、今もいつも世々としえに」。

助祭「アーメン」

ついで助祭は至聖所より出て、静かに述べる

「主よ、わが唇を開きたまえ。わが口はあなたの栄誉を語り告げよう」(詩篇 50.17)。

イコノスタシスの中央王門の前に立ち、拝礼して声を挙げ、歌う

「主よ、祝福を与えたまえ」

以降、会衆とともに執り行われる部分となる

司祭は福音書を両手で捧げ挙げ、それで十字を切り、声を挙げて歌いつつ述べる

「父と子と聖霊の王国は祝せられる、今もいつも世々としえに」

信徒「アーメン」。

司祭もしくは助祭は「大連禱」を歌う。

「大連禱」: 司祭「平安のうちに主に願おう」 信徒「主よ、憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける) 「天の平和、われらの霊の救いのために主に願おう」 「全世界の平和、神の聖なる教会の栄え、われらすべての者の一致のために主に願おう」 「この聖なる家のため、また信と熱意と神への畏れをもってここに集い来る者すべてのために、主に願おう」 「われらの聖にして普遍なる牧者の長、～教皇のため、神を愛するわれらの～司教のため、浄らかなる司祭職にある者のため、全教会と民のために主に願おう」 「この町のため、すべての町、共同体、地域、そこに住む信徒たちのために主に願おう」 「気候の恵みある温順、大地の作物のあふれる実り、平和な日々のため、主に願おう」 「航行する者、旅路にある者、病める者、疲れたる者、飢える者たちのため、またこれらの者の解放のため、主に願おう」 「主がわれらをあらゆる心労、怒り、危険、欠乏から救って下さるよう、主に願おう」 「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「いと聖にして浄らか、いと祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリヤを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ、あなたに」

司祭「あらゆる栄光，敬愛，崇拜は，父と子と聖霊よ，あなたにこそふさわしい．今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」．

司祭は静かに第1 アンティフォンの祈りを唱える

司祭黙禱：「われらの主，われらの神よ，あなたの力は比べようもなく，その栄光は捉えがたい．あなたの恵みは計りがたく，人への愛は語り尽せない．われらの主よ，あなたの慈しみによりてわれらを顧み，この幕屋をみそなわして，われらの上と，われらとともに願う者たちの上に，あなたのあふれる恵みと憐れみを注ぎたまえ」．

1) 「すべての大地よ，主に向かって喜べ！ その名に讃美を語れ．その誉れを栄光とせよ」(詩篇第65 編冒頭)¹²

「神の母の祈りを通して，救い主よ，われらを救いたまえ」

「あなたがたはすべての民の間で，主のくすしき業を告げよ」．

「神の母の祈りを通して，救い主よ，われらを救いたまえ」

「あなたがたは神に語れ．<主よ，あなたの業は何と恐るべきことか！ あなたの力の偉大さゆえに，あなたの敵はあなたにひれ伏す>」．

「神の母の祈りを通して，救い主よ，われらを救いたまえ」

「栄光は父と子と聖霊に．今もいつも世々とこしえに．アーメン」．

「神の母の祈りを通して，救い主よ，われらを救いたまえ」

司祭もしくは助祭は低く小連禱を唱える

「小連禱」：司祭「繰り返して平安のうちに主に願おう」 信徒「主よ，憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける) 司祭「神よ，あなたの憐れみによって，われらを守り，救い，憐れみ，強めたまえ」 「いとも聖にして浄らか，いとも祝せられし栄えあるわれらの王妃，神の母にして常に処女なるマリアを，すべての聖人とともに思い起こしつつ，われら自身とお互いを，そしてわれらの生命すべてを，われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ，あなたに」

司祭「権威，国，力そして栄光はあなたのもの，父と子と聖霊よ，今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」．

司祭は静かに第2 アンティフォンの祈りを唱える

司祭黙禱：「われらの主，われらの神よ，あなたの民を救い，あなたの嗣業を祝福したまえ．あなたの教会の完全さを守りたまえ．あなたの家の麗しさを愛する者たちを聖化したまえ．どうか彼らに神の力で誉れを帰し，あなたにより頼むわれらを見捨てたもうな」．

2) 「諸々の天は喜べ，大地は歓喜せよ．海とそこに満ちるものは動き出すがよい」

「神の子よ，われらを救いたまえ．あなたは肉において割礼を受けた方，われらはあなたに歌う，アレルヤ，アレルヤ，アレルヤ」(注：これは1月1日「主の割礼の記念日」に固有の句である)

「あなた方は主に歌え．その名をほめたたえよ．主による解放を，民から民へと告げ知らせよ」

「神の子よ，われらを救いたまえ．あなたは肉において割礼を受けた方，われらはあなたに歌う，アレルヤ，アレルヤ，アレルヤ」

歌隊が歌ううちに，司祭と助祭とは静かに自らに十字を切り，次の祈りを唱える．司祭は祈りの間，両腕を拡げる

「栄光は父と子と聖霊に．今もいつも世々とこしえに．アーメン」．

「神のひとり子にしてその御言葉，あなたは不死，われらの救いのため，聖なる神の母・とこしえに

¹² 以下，アンティフォンとトロパール，コンタークなど可変部分に関しては，*Dicsérvételek az Urat!* : *Görögyszertartású katolikus énekeskönyv*, a kiadásért felel: dr. Orosz László, Nyíregyháza 1994 を参照した．

処女なるマリアより肉を受けることを肯われた。あなたは変わることなく人となり、十字架に架けられた、われらの神キリスト。あなたは死をもって死に打ち勝った、聖なる三位一体の一位、父と聖霊とともに讃えられるべき方。われらを救いたまえ。」

司祭もしくは助祭は低く小連禱を唱える

「小連禱」：司祭「繰り返して平安のうちに主に願おう」 信徒「主よ、憐れみたまえ」（以下司祭の各導句に続ける） 司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「いとも聖にして浄らか、いとも祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ、あなたに」

司祭「あなたは善き方にして人を愛する神、われらはあなたをほめ讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに」 信徒「アーメン」。

司祭は静かに第3アンティフォンの祈りを唱える

司祭黙禱：「われらにこの共なる一致した祈りを賜ったあなたは、あなたの名において二人また三人が集うとき、彼らの願いを聞き届けると約束された。今このときにも、われらの主よ、あなたの僕が彼らのために仕えるこの執り成しを、御自ら果たさせたまえ。そして今このとき、われらがあなたの真理を知ること叶え、来るべき時にはわれらに永遠の生命を与えたまえ」。

3)「わたしは主の憐れみを世々に歌う」。

（当日のトロパール）「天のいと高きところにあつて、初めなき父・あなたの神の霊とともに、輝ける王の座に座せる方、おおイエスよ、あなたは咎なきおとめより、あなたの母よりこの世に生まれることを肯われた。そして8日目の嬰兒として割礼を受けられた。それゆえ、唯一ひとを愛する方よ、あなたの善意に満ちた意向に栄光あれ、あなたの計らいに栄光あれ、あなたの謙遜に栄光あれ」

司祭は静かに小聖入の祈りを唱える

「小連禱」：司祭黙禱：「治め主なるわれらの神よ、あなたは天にあつて天使・大天使の群れと隊列を、あなたの栄光への奉仕のために整える。いまわれらの聖人も、われらとともにあなたに仕え、あなたの善性を寿ぐ聖なる天使のものとならんことを。栄光、敬愛、崇拜はすべてあなたに相応しい。父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに。アーメン。あなたの聖なる者たちの入堂は祝せられる、†永遠の昔より、今もいつも世々としえに。アーメン」。

ここで福音の到来を体現する「小聖入」が行われ、会衆は起立する。

司祭と助祭は福音書を捧げて右側から祭壇を巡り、イコノスタスの北門から出て王門前に至り、そこで助祭は静かに司祭にこう語る

助祭「主よ、聖入を祝したまえ」

司祭は静かに

「あなたの聖なるものの入堂は祝される、永遠の昔より今もいつも世々としえに。アーメン」

司祭は福音書に接吻する。助祭もしくは助祭が不在の場合、司祭は福音書を高く挙げこう歌う

司祭「叡智！真なる信徒たちよ」

二人は至聖所に入り、福音書を祭壇に安置する。信徒は歌う

「聖入歌」：信徒「来たれ、キリストを崇め、その前に伏し拝もう。神の子よ、われらを救いたまえ。あなたは肉において割礼を受けた方、われらはあなたに歌う、アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ」。

歌隊は当日の「トロパール」および「コンターク」を歌う

次に掲げるのは2008年1月1日の場合のトロパールである。主日と2種の祝日のための、計3個の

トロパールが歌われた。

復活のトロパール(第8調)「憐れみ深いわれらの主よ、あなたは天の高みより降り、三日間にわたる墓での休息を受け入れた。それはわれらをも苦しみから解放するため。主よ、あなたはわれらの復活にして生命、あなたに栄光！」

「栄光は父と子と聖霊に」

祝日のトロパール「天のいと高きところであって、初めなき父・あなたの神の霊とともに、輝ける王の座に座せる方、おおイエスよ、あなたは咎なきおとめより、あなたの母よりこの世に生まれることを肯われた。そして8日目の嬰兒として割礼を受けられた。それゆえ、唯一ひとを愛する方よ、あなたの善意に満ちた意向に栄光あれ、あなたの計らいに栄光あれ、あなたの謙遜に栄光あれ」

「今もいつも世々とこしえに。アーメン」

聖バジルのトロパール「聖なるわれらの師父バジルよ、全地にはあなたの教えが広がっている。神的なものを告げたあなたの言葉は実を結び、あなたは実在する真理の本性を明らかにし、人間性の倫理をより高貴なものにまで高めた。王とさえ呼ばれた聖なる生涯を送りし師父よ、われらのために神なるキリストに祈りたまえ、われらに豊かな憐れみを与えたまえと」

当日は歌われることがなかったが 聖バジルと祝日のためのコンタークと神の母讃歌を掲げておく。聖バジルのコンターク「母にして聖なる教会の朽ちぬ支えとしてあなたは現れた、天の息吹を受けた聖バジルよ、人類に尽きることのない宝を、あなたの教えの真理のうちに与えつつ」

祝日のコンターク「万物の主よ、あなたは割礼を受け、善き方として人間の罪を刈り取り、きょう世界に救いをもたらす。創造する聖三位一体の司教にして、キリストの輝ける神的な司祭である聖バジルは、天の高みにあって喜ぶ」

神の母讃歌「天使より挨拶を受け、その胎に御言葉を宿し、あなたは救い主を、肉となった御言葉を産みになった、おお神の母よ、われらの霊の救いのために、主に祈りたまえ」

司祭は手を合わせ、次の祈りを静かに読み上げる

司祭黙禱：「聖なる神よ、あなたは聖なる者たちの間で休られる。聖三位の歌をもって、セラフィムはあなたを讃え、ケルビムはあなたに栄光を歸し、天のすべての権能はあなたを崇める。あなたは無からすべてを存在へと導かれた。あなたは人を自らの像また似姿として創造し、あらゆる恵みをもって装われた。求める者には叡智と理解を与えられたが、罪に墮ちる者も蔑ろにはせず、むしろ救いに向けて赦しを備えられた。あなたはわれら、癒しく相応しからざる僕らに対し、今このときにもあなたの聖なる祭壇の栄光の前に立ち、あなたに適わしき崇拜と讃美を捧げることを叶えられた。われらの治め主よ、われら罪びとの唇からも、聖三位の歌を自ら受け取りたまえ。そしてわれらをあなたの慈しみをもって顧みたまえ。意図してのあるいは意図せざるわれらの罪を、すべて赦したまえ。われらの霊と肉とを聖化し、われらの生涯のすべての日々において、聖性のうちにあなたを崇拜することを叶えたまえ。聖なる神の母、あなたの御前で世の初めより愛されしすべての聖人たちの祈りによりて」

ちなみに聖土曜日には、大晩課から続けてここで聖バジル典礼に接続されるが、その前に15個の聖書朗読が行われる。その15箇所とは、

創世記 1.1-13 イザヤ 60.1-16 出エジプト 12.1-12 ヨナ 1.1-4.11 ヨシュア 5.10-15
出エジプト 13.20-15.19

この第6朗読の間に「われらは主に歌おう、主は栄光を帯びて復活された」(および「馬とその御者を海に投げ入れて」)が歌われる。

ゼファニア 3.8-15 列王記上 17.8-24 イザヤ 61.10-62.5 創世記 22.1-19 イザヤ 61.1-9
列王記下 4.8-37 イザヤ 63.11-64.4 エレミヤ 38.31-34 ダニエル 3.1-88

この第 15 朗読の間に「あなたがたは主を讃え、主をとこしえにほめ歌え」が歌われる。聖土曜日は、その後に小連禱が行われる。

大晩課に聖バジル典礼を連結させる場合には、ここから合流する¹³。

司祭は声を挙げて

「われらの神よ、あなたは聖なる方、われらはあなたを讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも」

助祭がいる場合、こう続ける；不在の場合、司祭が続けて

「世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

「聖なる神、聖なる力、聖なる不死の者よ、われらを憐れみたまえ」(×3)、「栄光は父と子と聖霊に」
「今もいつも世々とこしえに。アーメン」、「聖なる不死なる者よ、われらを憐れみたまえ」、「聖なる神、聖なる力、聖なる不死の者よ、われらを憐れみたまえ」。

降誕祭、公現祭、聖土曜日等は「聖なる神」の代わりに

「キリストにおいて洗礼を受けた者は、キリストを着るものとなった。アレルヤ」(×3)。

司祭黙禱：「主の名によりて来たる者は祝される。あなたは御国の栄光の玉座にあってケルビムとともに座し、祝される。永遠の昔より、今もいつも世々とこしえに」。

「謹んで聴こう。あなたがたすべてに平安あれ。叡智！謹んで聴こう」

祝日のプロキメン「主よ、あなたの民を救い、あなたの嗣業を祝福したまえ」

聖バジルのプロキメン「わが口は智慧を語り、わが心の観想は叡智を思い巡らす」

聖木曜日のプロキメンは「諸国の民の長らは主に抗し、かの油注がれた者に抗して集まる」 挿句
「異教徒らは何故たくらみを抱き、民は何故虚しきことを考えるのか」

聖土曜日のプロキメンは「すべての大地はあなたを崇め、あなたに歌い、あなたの名に讃美を語るがよい」 挿句「すべての地よ、主に向かって喜べ、主の名に讃美を語れ」

司祭「叡智！」 朗読者「聖～使徒～書の朗読」 司祭「謹んで聴こう！」

<使徒書の朗読> 1/1 ならコロサイ 2.8-12 であるが、当日は「主の公現」前主日に当たったため 2 テモテ 4.5-8 であった。

司祭「あなたに平和」。「叡智！謹んで聴こう！」

信徒「アレルヤ」(×3)

聖木曜日には「心貧しく、より頼むものがない人は幸い、アレルヤ(×3)」 挿句「わがパンを食した者は、大きな偽りをわたしのうちになした。アレルヤ」。

聖土曜日には「神よ立ち上がれ、地を裁きたまえ。あなたはすべての民を嗣業として有される」 挿句「神は神々の集いに立ち、そこで神々を裁かれる」「あなた方はいつまで誤った思いを抱き、罪ある人を重んじるのか」「彼らはこれを知らず、理解もせず、闇の中を歩く」。

聖土曜日には、この句のやり取りの間に司祭は香部屋に順次退き、赤色の衣を白色のものに代え、福音前の祈りを静かに唱え、福音書朗読は祝日色の衣で行う

司祭黙禱：「人を愛するわれらの主よ、われらの心に、あなたの神性をめぐる知識の浄らかな光を燃え立たせたまえ。われらの霊の目を、あなたの福音の教えを理解するために開かせたまえ。われらのうちに、幸いをもたらすあなたの掟への畏れを注ぎ、あらゆる肉の欲に打ち克ち、霊的な生を生き、すべてをあなたの同意のもとに考え行うことができるように。あなたはわれらの霊と肉の照らし手、神なるキリストよ、われらはあなたを讃える。初めなきあなたの御父、いとも聖にして善性に満ち、生命を与える聖霊とともに、今もいつも世々とこしえに。アーメン」

¹³ 晩課の次第については、前掲注(3)拙稿「ビザンティン典礼における「テュピコン」の神学」を参照。

助祭（歌いつつ）「主よ、聖～福音記者を告げる者を祝したまえ」

司祭「神が、誉れ高き聖～（使徒）福音記者のとりなしを通して、福音の告知者であるあなたに、力ある言葉を授けて下さるように、神の愛しき御子、キリスト・イエスの福音の告知のために」

助祭「叡智！真なる信徒たちよ、聖なる福音を聞こう」

司祭「聖～による福音書の朗読」 信徒「主よ、あなたに栄光！」 助祭「謹んで聴こう」

<福音書の朗読> 1/1 ならルカ 2.20-21；2.40-52 であるが、当日は「主の公現」前主日に当たったためマルコ 1.1-8 であった。

朗読が終わると司祭は福音書の裾に接吻し、助祭に対し静かにこう述べる

「福音の告げ手なるあなたに平安」。

信徒は「あなたに栄光、わが主よ、あなたに栄光」と応じ、司祭による説教が行われる。

「三重連禱」：司祭ないし助祭は、王門の前に立ち、次の連禱を歌いつつ述べる

司祭「われらすべて、まったき心・まったき霊でもって語ろう！」 信徒「主よ憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける) 司祭「われらが全能の主、われらの師父たちの神、われらはあなたに祈る、われらに耳を傾け憐れみたまえ」 「神よ、あなたの大いなる憐れみによって、われらを憐れみたまえ。われらはあなたに請いねがう、われらに耳を傾け、憐れみたまえ」 信徒「主よ憐れみたまえ(×3)」(以下司祭の各導句に続ける) 司祭もしくは助祭「さらに真なる信もつわれらの使徒的王 N のために、彼の力と勝利、絶えることなき平安なる治世、健康と救いのために祈る。われらの神なる主がいっそう彼に助力を注ぎ、あらゆる善きことにおいて彼を導き、その足元にすべての敵と抗う者を敷くことができるように」

司祭黙禱：「われらの主、われらの神よ、この篤き嘆願をあなたの僕より受け取りたまえ。そしてあなたの憐れみの豊かさによりてわれらを憐れみたまえ。あなたの憐れみをわれらと、あなたのあふれる恵みを待ち望むすべての民の上に送りたまえ」。

司祭もしくは助祭「さらに、神を愛するわれらの司教～のため、われらの霊的父のため、そしてキリストにおけるあらゆるわれらの兄弟たちのために願おう」 「さらに、ここに集いあなたから大いなる豊かな恵みを待ち望む民のため、われらの恩人のため、また真なる信仰をもつすべてのキリスト教徒のため、主に願おう」

司祭「あなたは憐れみ深く人を愛する神、父と子と聖霊よ、われらはあなたを讃える、今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

「求道者の連禱」：司祭「求道者よ、主に向かって祈ろう」 信徒(以下同様)「主よ、憐れみたまえ」 「信徒たちよ、求道者のために祈ろう、主が彼らを憐れんでくださるように」 「彼らが、真理の言葉へと教え導かれるように」 「彼らに真理の福音が開示されるように」 「彼らが聖にして普遍、使徒継承なる教会と一致するように」 「神よ、あなたの憐れみによりて、彼らを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「求道者よ、主に頭を垂れよ」

司祭黙禱：B (注：以下この記載がある場合は、当該祈禱句がクリュソストモス典礼の場合と異なりバジル典礼固有のものであることを示す)「われらの主、われらの神、いと高きところに住まわれる方よ。あなたは卑しき者たちを顧み、人類の救いのために御一人子を、われらの主にしてわれらの神なるキリスト・イエスを遣わされた。求道者なるあなたの僕たち、あなたの御前に頭を垂れる者たちを顧みたまえ。相応しき時期には、彼らを新たなる誕生の場、罪の赦し、潔き衣の獲得に適う者となさしめたまえ。聖にして普遍、使徒継承なるあなたの教会と彼らが一致し、あなたの選ばれた群れのう

ちに数えられるように」.

声を挙げて

「彼らもまた、われらとともにいと高きあなたの名を讃えんことを、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに」「アーメン」「求道者よ、こぞって去るがよい。求道者よ、去るがよい。求道者よ、みな去るがよい。求道者の誰も残らぬように。信徒たちよ、みなこぞってまた再び、平安のうちに祈ろう」「主よ憐れみたまえ」

3. 「信徒礼儀」

1) アナフォラの初め

司祭黙祷：B「主よ、あなたはわれらに、救いのこの神秘を示してくださった。あなたはわれら、卑しくまた相応しからぬしもべらを、あなたの聖なる祭壇の奉仕に適うものとしてくださった。あなたはわれらを、聖なる霊の力を通して、この奉仕にも用いてくださる、われらが裁きを受けることなく、あなたの聖なる栄光の前に進み出、あなたに誉れある生贄を捧げることができるように(詩篇 49,14)。あなたは万物においてすべてを成し遂げられる方。主よ、あなたの御顔の前に、民の過ちのためまたわれらの罪のため、われらの奉献を、御旨に叶い、受け入れられるものとなさせたまえ」

「信者の連祷」：司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」信徒「主よ憐れみたまえ」司祭「叡智！ すべて栄光、敬愛、崇拝はあなたにこそ相応しい、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに」信徒「アーメン」司祭「繰り返して平安のうちに主に願おう」信徒「主よ、憐れみたまえ」

司祭黙祷：B「神よ、あなたは慈しみと憐れみのうちに、われらの謙遜を見そなわし、われら、罪深く相応しからぬあなたのしもべらを、あなたの聖なる栄光の前に立たせ、あなたの聖なる祭壇の前に仕える者とされた。どうかあなた自ら、聖霊の力を通して、われらをこの奉仕に向け力づけたまえ。われらが唇を開くとき、われらに適わしき言葉を授け、献げられるべき奉献物に、聖霊の恵みが注がれるべく願うことができるように」

司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」信徒「主よ憐れみたまえ」司祭「叡智！ あなたの力によりて常に守られ、われらはあなたをほめ讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに」信徒「アーメン」.

ここで、キリストの葬り・葬礼を表す「大聖入」が行われ、信徒は起立する。信徒は「ケルビムの歌」を歌う。

「われらはケルビムを神秘的にかたどり、生命を与える聖三位一体に、三度歌を捧げ、いまあらゆる世の思いを打ち棄てよう」.

司祭黙祷：「肉の欲や喜びが束縛している者は、あなたのもとに赴きまた近づき、あるいはあなたに仕えることは相応しくない。栄光の王よ。あなたに仕えることは、天の諸力にとってさえ、偉大にして怖ろしきこと。しかしあなたは、言葉に尽くせず計りがたき人への愛により、まごうことなく人となりわれらの大司祭という名を帯び、万物の主として、さらにこの務めと血を流さぬ奉献の執り行いをわれらに委ねられた。われらの主にしてわれらの神よ、天と地にあるものに対し、あなたのみが治め、ケルビムの座に運ばれ、セラフィムの主、イスラエルの王として、あなたのみが聖にして、聖なるものうちに安らわれる。唯一善き方よ、あなたに願う、慈しみをもって耳を傾け、この罪びとにしてあなたに適しからざる僕のわたくしを顧みたまえ。わが霊とわが心を、悪しき咎めから浄めたまえ。あなたの聖なる霊の力によりて、司祭職の恵みのうちにその衣を身に付けたわたくしを、この聖なるあなたの祭壇の前に立ち、聖性に満ち、染みなきあなたの体と尊いあなたの血を献げるに相応しき者となさしめたまえ。わたくしは傾けた頭をもってあなたのもとに参じ、あなたに願う。どうかあなた

の御顔をわたくしから逸らしたもうな．あなたの子らがこれを妨げることなく，この罪びとにして値せぬあなたの僕なるこのわたくしをして，この奉納をあなたに献げるに適う者となさしめたまえ．あなたは犠牲を捧げかつ犠牲として捧げられ，それを受け入れかつ分かち与えられる方，われらの神なるキリストよ，われらはあなたを讃える．初めなきあなたの御父，いとも聖にして善性に満ち，生命を与えるあなたの霊とともに，今もいつも世々としえに．アーメン」．

司祭は「ケルビムの歌」を静かに唱える

「われらはケルビムを神秘的にかたどり，生命を与える聖三位一体に，三度歌を捧げ，いまあらゆる世の思いを打ち棄てよう．われらは万物の王を抱く，天使の群れが目に見えぬあり方で運ぶその方を．アレルヤ，アレルヤ，アレルヤ」

聖木曜日にはこの「ケルビムの歌」に代えて「神の子よ，わたくしをあなたの神秘の宴に与るものとして受け入れたまえ．わたくしはこの神秘を，あなたに逆らう敵には口外しない．またユダのようにあなたに接吻することもしない．むしろ，あの罪びとのようにあなたに告白する．わが主よ，あなたが御国に来られるとき，わたしのことを思い起こしたまえ．アレルヤ」

聖土曜日には同じく「すべて肉を帯びた人よ，聞け．おそれおのいて立ち，地の思いを何ら抱くなかれ．王たちの王，治め主たちの主が来られる．自らを捧げ，信徒らのための食物とするために．天使らの群れ，すべての始まりと諸力はその前に赴き，多眼のケルビム，六翼もつセラフィムはその面を隠し，この歌を呼び交わす．アレルヤ」

司祭と助祭は祭壇と十字架に接吻し，述べる

「神よ，この罪びとなるわたくしに憐れみ深くあれ」

奉献台に向かい，そこで司祭は助祭に大覆いを手渡し，述べる

「あなたがたはその両の手を平安のうちに聖なるものに挙げ，主に捧げよ」

大聖入により奉納物を祭壇に移す．助祭は声を挙げる

「真なる信もつキリスト教徒たちよ，主なる神がその御国において，あなた方のことを，常に，今もいつも世々としえに思い起こしてくださるように」．

(司祭は続ける)「聖なる，われわれの首たる牧者～教皇，神を愛するわれらの～司教，全司祭団，全教会の組織，この聖なる家の幸いにして永遠に記憶さるべき創設者と善業者たち，そして，真なる信を持つキリスト教徒たちよ，あなた方すべてのことを，主なる神がその王国において常に思い起こして下さるように，今もいつも世々としえに」

信徒は「ケルビムの歌」の後半を歌う

「アーメン，われらは万物の王を抱く，天使の群れが目に見えぬあり方で運ぶその方を．アレルヤ，アレルヤ，アレルヤ」

司祭黙禱：「神を畏れるヨセフは，十字架の木よりいとも浄らかなるあなたの体を取り降ろし，淨い亜麻布に包み，相応しきしつらえを施して，新しき墓に葬った」

三度香を振り，述べる

「主よ，あなたの善き意向により，シオンにあって，エルサレムの石壁が建てられるよう，慈しみ深く取り計らいたまえ．そのとき，真理のいけにえ，奉納，焼き尽くすいけにえを親しく受け取りたまえ．そのおりにあなたの祭壇に雄牛が捧げられよう」(詩篇 50.20 - 21)．

助祭に小声で

司祭「兄弟そしてしもべなる仲間よ，私を思い起こしたまえ」

助祭「主なる神があなたの司祭職をその御国において思い起こしてくださるように．主よ，わがために祈りたまえ」

司祭「聖霊があなたに降り，いと高き方の力があなたを覆うように」

助祭「この霊ご自身がわれらとともに，われらの生涯のすべての日々，働かれんことを．主よ，わたしのことを思い起こしたまえ」

司祭「主なる神があなたのことを、その御国において思い起こしてくださるように。常に、今もいつも世々とこしえに」

助祭「アーメン」

「完遂連禱」: 司祭は祭壇に留まり、ないし助祭が身を低くして王門の前に赴き、声を挙げて連禱を始める「われらの願いを、主に向けてまっとうしよう」 信徒「主よ憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける) 司祭「この、前に置かれた尊い賜物のため、主に願おう」「この幕屋のため、ここに信と、篤き思いと、神への畏れをもて集えるすべての者のため、主に願おう」「主がわれらをあらゆる心労、怒り、窮乏から守ってくださるよう、主に願おう」

司祭黙禱: B「われらの主なる神よ、あなたはわれらを創り、この生へと導き、われらに救いの道を示し、天なる神秘の開示という賜物を与え、われらを聖霊の力によってこの奉仕に叶うものとされた。どうかあなたの同意をもって、われらを新しき契約のしもべ、あなたの聖なる神秘のための働き手となさせたまえ。われらを受け入れ、あなたのあふれる憐れみにより、あなたの聖なる祭壇に赴き、民の過ちのためまたわれらの罪のために、あなたにこの知的で血を流さぬ生贄を捧げるに適うものとなさせたまえ。その奉納を、親しき霊的芳香として、あなたの聖なる霊的祭壇へと受け入れ、われらにはその代わりに、あなたの聖なる霊の恩寵を遣わしたまえ。おお神よ、われらを見そなわし、われらのこの奉仕を心に留めたまえ。かつてあなたが、アーベルの供え物、ノアの捧げもの、アブラハムの天上のないけにえ、モーセとアロンの奉仕、サムエルの和解の生贄を嘉したもうたように、この捧げものを受け取りたまえ。あなたの聖なる使徒たちからこの真なる奉仕を親しく受け取られたように、あなたの善性により、われらの罪あるこの手からも、この奉納を受け取りたまえ。かくしてわれらが、あなたの祭壇のための咎なき奉仕に適うものとなり、あなたの真なる恐ろしき日に、忠実にして知的な者としての報いをかち取ることができるように」。

司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 信徒「主よ憐れみたまえ」「この一日を通して、完徳のうちに、聖性ととともに、平安に罪なく過ごせるよう、主に求めよう」 信徒「主よ叶えたまえ」(以下同様に) 司祭「平和の天使、信篤き導き手、われらの霊と肉の守り手を、主に求めよう」「われらの罪と過ちの、赦しと寛容を主に求めよう」「われらの霊に善と益を、世には平和を主に求めよう」「われらの生の残りの期間を平安と痛悔のうちに過ごすことができるよう、主に求めよう」「われらの生を、キリスト教徒としてのあり方で苦悩と恥なく送れるよう、そしてキリストの恐れ多き裁きの座の前で、善き答えができるよう、主に求めよう」「いとも聖にして浄らか、いとも祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ、あなたに」。

司祭「あなたは御一人子とともに祝される、その御子の憐れみにより、いとも聖にして善性に満ち、生命を与えるあなたの霊とともに、今もいつも世々とこしえに」。信徒「アーメン」。

「平和の接吻・挨拶」: 司祭「あなた方皆に平和があらんことを」 信徒「あなたの霊にも」 司祭「われら互いに愛し合い、一致のうちに告白しよう」 信徒「父と子と聖霊を、一にして分かれざる聖三位一体を」

司祭は覆い、ディスコス、杯の上、そして祭壇に接吻し、こう述べる

司祭黙禱:「主よ、わが力よ、わたくしはあなたを愛する、主はわが力、わが祭壇」(詩篇 17.2)

司祭「扉、扉! 叡智のうちに身をつつしもう」。

「使徒信条」:「わたくしは信ず、一なる神、全能の父、天と地と、すべての目に見えるもの見えざるものの創り主を。また一なる主、キリスト・イエス、神の一人子、父より永遠の昔に生まれた方を信ず。光よりの光、真なる神よりの真なる神、生まれたのであって創られたのでない方を。主は父と同

一実体であり、万物はこの父によって成った。主はわれらのため、人々のため、われらの救いのために天より降り、聖霊によっておとめマリアより肉を受け、人となった。そしてポンティウス・ピラトゥスの許でわれらのために十字架に付けられ、苦しみを受けたのち葬られ、諸書に記された通り三日目に復活し、天に昇って父の右の座に就き、栄光を帯びて、生ける者と死せる者を裁くために再び来られ、その王国には終焉がない。さらに聖霊、われらの主にしてわれらに生命を与える方を信ず。彼は父と子より生まれ、父と子とともに崇められ、讃め称えられ、預言者たちによって語られた方。わたくしは信ず、一にして聖、普遍的にして使徒的なる、母にして聖なる教会を。わたくしは罪の赦しのための一なる洗礼を信ず。死者たちの復活と来たるべき永遠の生命を信ず。アーメン。

司祭は使徒信条が終わると、「聖なる神」を三度唱える。次いで

司祭「憂いなく立ち、畏れをもって立ち、聖なる犠牲を平和のうちに捧げることができるよう、身をつつしもう」 信徒「平和の憐れみを、誉れの犠牲を」

司祭「われらの主イエス・キリストの憐れみ、父なる神の愛、聖霊の交わりがあなた方皆とともに」 信徒「あなたの霊とも」。

2)「アナフォラ」(奉献文)

対話 司祭「われらの心を挙げよう」 信徒「主に向けて挙げます」 司祭「主に感謝を捧げよう」
序歌 信徒「父と子と聖霊を、一にして分れざる聖三位一体を崇めることは、相応しく正しきこと」

司祭は腕をひろげ、静かに

司祭黙禱：B「治め主なるわれらの主、神よ、全能にして崇められる父よ、あなたのみを真なる神として讃え、歌い、寿ぎ、あなたに感謝を捧げ、あなたを讃え、打ち砕かれた心とへりくだる霊で今われらの知的な奉仕をあなたに捧げることが、真に相応しくまた正しく、あなたの聖性の高みに叶わしきこと。あなたはわれらに、真理の認識を賜った。生ける言葉であなたの力を述べ、あなたの栄光のすべてを相応しく表現し、あるいは休むことなく為されるあなたの奇跡を語ることなど、誰ができよう。あなたは万物の王、天と地、目に見えたと見えざるを問わずあらゆる被造物の主、栄光の玉座に座し、深淵まで見透される方、初めなく目に見えず、捉えられず、述べ明かし得ず変わることはない方、われらの主イエス・キリスト・われらの偉大な神・われらの救い主にして希望である方の父。主はあなたの善性の像、そしてあなたの御顔の忠実な写し、生ける言葉、真なる神、永遠の智慧、生命、聖性、力にして真なる光。彼を通して聖霊・真理の霊、子として迎えるという賜物、来たるべき嗣業の担保、永遠の善の始まり、生命を与える力にして聖性の泉があらわれた。この方から、知あり理性に叶う被造物はみな力を得て、あなたに仕え永遠の讃美を歌う。万物はあなたに仕える。天使たち、大天使たち、玉座、支配、始まり、権能、力そして多眼のケルビムらはあなたを讃美する。セラフィムらはあなたを囲み、そのいずれにも6枚の翼がある。その2枚をもって顔を覆い、2枚をもって足を覆い、2枚をもって宙に舞い、決して休むことのない唇と消えることのない讃美をもって互いに呼び交わす」

司祭は声を挙げて

「勝利の歌を歌い、叫び、呼ばわって述べる」

信徒「勝利の歌」：「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、天と地はあなたの栄光に満つ。いと高きところには栄光、主の名によりて来たる者は祝される、いと高きところには栄光」。

司祭は改めて痛解し、聖なる犠牲を献げる意向を自ら新たにしたのち、静かに

司祭黙禱：B「人への愛に満ちたわれらの主よ、これらの幸いなる諸権能とともに、罪びとなる私たちもまた、叫びを上げて述べる。あなたは真に聖なる方、至聖であり、あなたの聖性の輝かしさは計り知れない。あなたはあらゆるその業にあって聖なる方、あなたは真理と真なる裁きにおいて、すべてをわれらのために取り計らわれる。」

神よ、あなたは大地より塵を取って人間を作り、あなたの像に向けて尊び、彼を豊穡の樂園に置き、あなたの掟を守ることのうちに、生命の不死性と永遠の善きものの享受を彼に命じられた。しかし人は真なる神であるあなた、創り主である方に背き、ヘビの欺きに屈し、自ら自身の躓きのために盲目となった。その彼を、神よ、あなたは正しき裁きのうちに樂園からこの世に追放し、彼がそこから取られた大地に向かわせ、彼のために再生による救い、あなたの子キリストその方における救いを取り計らわれた。あなたは自らの被造物を最後まで見捨て置くことはせず、憐れみに満ちたそのはらわたをもって様々な仕方で彼に目を向けられた。預言者を遣わし、各世代にあってあなたの心に適う聖なる者たちを通して権能を形づくり、あなたの僕なる預言者たちの口を通してわれわれに語りかけ、やがて来たるべき救いをわれわれに予め告げられた。助けのために法を与え、守り手たる天使らを立てられた。そして時が充ちると、あなたは、御子、その方を通して永遠を創られた方において、われらに語られた。

この方はあなたの栄光の輝き、あなたの実体の刻印である方、その力の言葉をもって万物を担い、神にして父であるあなたと等しくあることを略奪とは考えず、永遠の神として地上に現れ、人間とともに生き、聖なる処女から肉を受け、自らを虚しくし、僕の姿を取り、われらの卑しき体と同じ姿となった。姿を同じくするわれらを、自らの栄光の似像とするためである。人を通して罪がこの世に入り、罪のゆえに死が訪れた。だがあなたの唯一人の御子は、神であり父であるあなたのふところにおいて、聖なる神の母である婦人、常世に処女なるマリアより生まれ、律法に従う者となり、自らの肉において罪を裁くことを良しとされた。アダムのうちには死ぬ者が、あなたの子キリストにおいて生かされる者となるためである。主はこの世で生活し、救いの掟を付与し、われらを偶像の欺きから引き離し、真なる神であり父であるあなたへの認識へと導き、われらをあなたの選ばれた民、王的司祭職、聖なる民族として定められた。水において浄め、聖霊のうちに聖化し、われわれが罪のゆえに売られ閉じ込められていた死の代価として自らを与えられた。そして十字架を通じ、万物を自らによって満たすために黄泉に下り、死の苦悩を解き放ち、三日目に復活し、すべての肉に死者からの復活の道を拓かれた。生命の創始者が腐敗に支配されることはありえなかった。こうして主は眠れる者たちの初穂、死者からの初子となった。主がすべてにおいて初めの者としてすべてとなるためである。さらに天に昇り、天上において偉大なるあなたの右の座に着かれた。そして主は、各々の者に対し、その業に報いるために来られる。こうして主はわれらに、自らの救いのための受難の記念を遣し、われわれは主の命にしたがってそれを定めた。主は、永遠に記憶され、生命を与える死に自ら進んで赴くに際し、世の命のために自らを渡される夜に」

「聖体制定句」

司祭は左手にディスクスを取り、聖パンとともに、少し捧げ持ち、静かに祈りを続ける

「その聖なる汚れなき手でパンを取り、神にして父であるあなたに献げ、感謝し、祝福して†、聖なるものとし†、割き†」

最後の3語を発するとともに、聖パンの上に3度十字を切り、その後声を挙げて述べる

「自らの聖なる弟子・使徒たちに与えてこう言われた、取りて、食べよ。これはわたしの体、あなた方のため、罪の赦しのために裂かれるもの」

信徒「アーメン」

司祭は深く身をかがめ、杯を覆い、静かに

「同じように、ぶどうの実りで満たした杯を取り、捧げ持ち、感謝し†、祝福して†、聖なるものとし†、最後の3語を発するとともに、聖ぶどう酒の上に3度十字を切り、その後声を挙げて述べる

「自らの聖なる弟子・使徒たちに与えてこう言われた、みなここから飲むがよい、これはわたしの血、新しい契約の血、あなた方と多くの人々のため、罪の赦しのために注がれるもの」

信徒「アーメン」

司祭は深く身をかがめたのち、腕をひろげ、静かに

司祭黙禱：「あなたがたはこれをわたしの記念として行いなさい。あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、わたしの死を告げ知らせ、わたしの復活を告白しなさい」

アナムネーシス

「こうして主よ、私たちも、救いをもたらすあなたの受難、生命をもたらす十字架、三日間の埋葬、死者のうちからの復活、天への凱旋、神であり父であるあなたの右の座からの、栄光を帯びての威厳ある到来を思い起こす」

司祭は右手にディスコスを、左手に杯を取り、両腕を十字に交差させ、その聖パン・聖杯をささげ持ち、声を挙げて述べる

「われらはあなたのものを、あなたのものからあなたに捧げる。われらすべてとすべてのもののために」

信徒「主よ、あなたをほめ歌い、あなたを祝し、あなたに感謝を捧げ、われらの神よ、あなたを崇める」

エピクレーシス

司祭は深く身をかがめる。腕をひろげ、静かに

司祭黙禱：「こうして、いとも聖なる主よ、われらは罪びとでありふさわしくない僕、しかし聖なるあなたの祭壇で仕えるに叶う者とされた。それはわれわれの正しさゆえではなく、またこの世で何か善いことを為したためでもなく、ただあなたの憐れみと情け深さによる。その憐れみを、あなたはわたしたちの上に豊かに注がれた。われらは信頼をもってあなたの聖なる祭壇に近づき、あなたの子キリストの聖なる体と血の徴を捧げる。聖にして聖なる方、われらはあなたに願い、呼び求める。あなたの善性ゆえの同意により、あなたの聖霊がわれらの上、そしてここに置かれた賜物・献げものの上に来たるように。そしてこれらを祝福し、聖化し、示したまえ」

司祭は助祭とともに、3度身をかがめ、その間に十字を切り、小声でこう祈る

；注：スラブ起源による挿入句

「主よ、あなたのいとも聖なる霊を、第3時にあなたの使徒たちの上に遣わした善き方よ、この霊をわれらから取り去らず、あなたに願い求めるわれらのうちに新たにしたまえ」「神よ、わたしのうちに淨い心をつくり、わたしの内に直き霊を新たにしたまえ」「主よ、あなたのいとも聖なる霊を、第3時にあなたの使徒たちの上に遣わした善き方よ、この霊をわれらから取り去らず、あなたに願い求めるわれらのうちに新たにしたまえ」「あなたの御顔からわたしを遠ざけず、あなたの聖なる霊をわたしから取り去りたもうな」「主よ、あなたのいとも聖なる霊を、第3時にあなたの使徒たちの上に遣わした善き方よ、この霊をわれらから取り去らず、あなたに願い求めるわれらのうちに新たにしたまえ」

司祭は聖パンに三度十字を切り、静かに

「このパンを†、われらの主なる神、われらの救い主イエス・キリストの尊い体に」

聖ぶどう酒を祝福し

「この杯を†、われらの主なる神、われらの救い主イエス・キリストの尊い血に、世の生命のために注がれたものに」

両者をともに

「あなたの聖なる霊によって変容させたまえ」

(ギリシア語版では、助祭の「アーメン、アーメン、アーメン」が挿入される)

司祭は深く身をかがめたのち、腕をひろげ、さらに静かに祈りを続ける

「この一つのパン、一つの杯に与るわれらすべてを、一なる聖霊の共同体のうちに、互いに一つにしたまえ。そして裁きや断罪に値するわれらの誰も、あなたの子キリストの聖なる体と血に与ることがなく、むしろあなたの憐れみと恵みを見出さんがために」

記憶

栄光ある教会のため（聖人記憶） 司祭「さらにあなたに、知によるこの奉仕を献げる。信仰のうちに眠りに就いた者たち、先祖、父祖、族長、預言者、使徒、告知者、福音記者、殉教者、証聖者、修道者、また信仰のうちに生を全うしたすべての正しき霊のため」

司祭は聖パン・聖ぶどう酒に香を振り、その間に声を挙げて述べる

「とりわけいと聖にして、いとも浄らか、いとも祝せられし誉れあるわれらが王妃のため、神の母にして常世に処女なるマリアのため」

B：信徒「わたくしの霊は、いと高き軍勢にあって、いとも崇敬に値する方をほめたたえる」

「恩寵に満たされた方よ、創られたものはすべて、あなたのうちに喜ぶ。天使の群れも、人の類もすべて。あなたは聖化された幕屋、霊の楽園、おとめらの誉れ。あなたを通して神は肉を取り、子として生まれた、永遠の昔より神であった方が。神はあなたの胎を天の玉座となし、あなたの体を天よりも麗しきものとされた。恩寵に満たされた方よ、創られたものはすべて、あなたのうちに喜ぶ。あなたに栄光」。

聖木曜日にはこれに代えて「来たれ、信徒らよ。治め主の、また高き座に輝く秘された食卓の救いの奇跡を、われらは高められた霊もていただく。そして不死なる御言葉の聖なる教えを抱き、この御言葉を讃える」

聖土曜日には同様に「おお母よ、咎なきあなたの胎に宿された子を墓に見て、わがために泣きたもうな。わたしは復活し、讃えられ、神として、あなたを信と愛のうちに崇める者たちを、栄光でまとうのだから」

続いて、助祭がいる場合には、歌の間に祭壇に香を振る。司祭は腕をひろげ、静かに祈る

司祭黙禱：「洗礼者にして預言者なる聖ヨハネと先駆者たちのため、聖にして栄えある、いとも誉れにみちた使徒たちのため、今日われらがその記憶を記念する聖～のため、またあなたの全聖人たちのため、彼らのとりなしによって恵み深くわれらをみそなわしたまえ、われらの神よ」。

苦しむ教会のため（物故者記憶） 「主よ、あなたのしもべ N・N を御心に留めたまえ。われらの神よ、そして彼らを、いかなる悲しみも嘆きもない光の場所に移し、憩わせて、あなたの御顔の光に彼らを見守らせたまえ」。

闘う教会のため（生者記憶） B：「主よ、われらは願う。聖にして普遍的、使徒的なるあなたの教会を想い起こしたまえ。それは大地の一方の端からもう一方の端まで広がり、あなたが御子キリストの尊い血のうちにかち取られたもの。この教会に平安を与えたまえ。この聖なる幕屋を、時の終わりに到るまで強めたまえ。主よ、あなたにこのいけにえを捧げた者たちのことを記憶に留め、その人々を通してまたその人々により、いけにえが捧げられた者たちを、記憶に留めたまえ。主よ、あなたの聖なる教会のために捧げものをもたらし、善行をなし、貧しき者たちを援助する者たちを想い起こしたまえ。彼らに対し、豊かにして天上的なあなたの賜物をもって報いたまえ。彼らのために、地上のものには天のものを、つかの間のものには永遠のものを、朽ち行くものには尽きることなきものを賜物として与えたまえ。主よ、荒れ野の孤独、山林、洞窟、また地の洞穴にあつて痛解をなすあなたのしもべのことを記憶に留めたまえ。主よ、処女性、祈り、自己犠牲、誓願による清い生活のうちに日々を過ごす者たちのことを想い起こしたまえ。主よ、真なる信もつわれらの使徒的王 N。のことを記憶に留めたまえ。彼をあなたが正しきものとなし、この世にあつて民を治め導けるように。真にしてあなたの同意を伴う武具でもって彼をまとい 戦いの時には守護の翼をもってその頭を覆い 腕を強め、その右の手に栄光を帰し、その支配を力強きものとし、あらゆる敵を彼の足下に置きたまえ。彼に長く煩いなき平安を与え、その心にはあなたの教会とあなたのすべての民のための善き決断を吹き込みたまえ。彼が安らうときには、われらがみな温順にして戦のなき生を、まっただき祈りと浄さのうちに

生きることができるように。主よ、異教徒がもつすべての権威と力、王宮にて働くわれらの兄弟、すべての軍隊を記憶に留めたまえ。その善性における善きものはさらに維持し、悪しきものはあなたの恵みによりて覆したまえ。主よ、いまここに集える民と、正しき理由のため不在の者たちのことを記憶に留めたまえ。あなたの憐れみの豊かさによりて、彼らとわれらを憐れみたまえ。食料庫をすべての善きもので満たし、家庭を平安と一致のうちに守りたまえ。子供たちを育み、若者を教育し、老いたる者を養い、小心なる者を奮い立たせ、散らされた者を郷里に戻し、道から逸れた者を立ち返らせ、聖にして普遍的、使徒的なるあなたの教会のうちに彼らを一つにさせたまえ。浄らかならぬ想いのために煩える者たちを救い、船で行く者とはともに船で行き、旅路にある者とはともに旅をさせたまえ。やもめを養い、孤児を守りたまえ。囚われ人を解放し、病める者を癒したまえ。われらの神よ、裁きの座の前に立たされた者、炭鉱の中、追放の地、辛き隷属の身にある者たちを心に留めたまえ。煩い、欠乏、拷問に苦しめるすべての霊を思い起こしたまえ。そして、あなたの大きい憐れみを必要としている者たちすべてを心に留めたまえ。われらを愛する者と忌み嫌う者たち、われらの相応しからぬ祈りに自らを献げる者たちを思い起こしたまえ。主よ、あなたの民すべてを心に留め、彼らすべてにあなたの憐れみの豊かさを注ぎ、彼ら一人ひとりの恭しき求めを満たしたまえ。そしてわれらが忘却、無知、あるいは名の多さのゆえに、いまだ思い起こしていない者たちのことも、あなた自ら心に留めたまえ。おおわれらの神よ、あなたはすべての人々の齢と名に通じ、すべての者をその母の胎より知り尽くす方。あなたこそ、助けを欠く者の助け、絶望に陥った者の希望、突風にあおられた者の救い、船で行く者の避難所、病める者の癒し手。われらすべての持つものは、すべてあなた自身のもの。あなたはすべての者を知り、われらのいかなる需めも、家も、必要も知り尽くしておられる。

主よ、この町（共同体）、全ての町、共同体、村を、飢え、疫病、地震、津波、竜巻、火事、戦争、外敵の侵入、そしてすべての内乱から救いたまえ」

声を挙げて

「まず初めに、われらの主よ、聖なる、われわれの首たる牧者～教皇、神を愛するわれらの～司教に御心を留めたまえ、そして彼らを聖なるあなたの教会で、平和、安寧、品位、健康そして長命のうちに、あなたの真理の言葉を相応しく述べ伝えられるよう、守りたまえ」。

信徒「われらみなをも、みなのもをも」。

司祭黙祷：「主よ、真なる信もつすべての司教、あなたの真理の御言葉を相応しく述べ伝える者たちを心に留めたまえ。主よ、あなたの憐れみの豊かさによりて、このわたくしの不相応なることにも心を留め、意図してまた望まずして犯したるすべてのわが過ちを赦したまえ。あなたの聖なる霊の恵みを、われらの前にあるこの献げものから、わが罪のゆえに取り去ることはなしたもうな。

主よ、司祭、キリストにおける助祭、教会のすべての位階を心に留めたまえ。そしてあなたの聖なる祭壇を囲む者たちのうち、いかなる者にも恥をかかせたもうな。主よ、恵み深くわれらを見そなわし、あなたの憐れみの豊かさのうちに、われらにその姿を現したまえ。温順にして有効な気候をわれらに与え、大地には実りをもたらす雨を注ぎ、ひととせの巡りをあなたの恵みのうちに祝福したまえ。教会の分裂を終わらせ、異教徒たちによる騒乱を止めさせ、聖なるあなたの霊の力をもって、速やかに異端の抵抗をくじきたまえ。太陽とともに光の子となし、われらすべてをあなたの御国に受け入れたまえ。われらにあなたの平安と愛とを与えたまえ、主なる神よ。あなたはすべてをわれらに与えてくださる」。

栄唱（司祭は続いて声を挙げ）「そして一つの口、一つの心で、父と子と聖霊よ、われらがあなたのいと尊く高貴なる名を讃え、ほめ歌うことが叶うように、今もいつも世々としえに」

信徒「アーメン」。

う）拝領の儀

祝福：司祭「われらの偉大なる神にして救い主，われらのイエス・キリストの恵みがあなた方皆とともに」。信徒「あなたの霊とも」

「増連禱」：司祭「全聖人を思い起こしつつ，今一度繰り返して平和のうちに主に願おう」 信徒「主よ憐れみたまえ」(以下同じく) 司祭「奉納され聖化された尊い供え物のため，主に願おう」 「われらの憐れみ深き神が，いとしき霊の芳香を通して，これらを天の霊的な祭壇へと受け取り，われらに神の恵みと聖霊の賜物を贈りたもうよう，主に願おう」 「主がわれらをあらゆる心労，怒り，欠乏から救いたもうよう，主に願おう」 「主よ，憐れみたまえ」

司祭黙禱：B「われらの神，救いの神よ，どうかわれらを教え諭し，あなたの善き業のゆえに，あなたに相応しく感謝を捧げることができるように導きたまえ。そこは，あなたがこれまでわれらに与からせ，いま与らせておられる場。われらの神よ，あなたはこの捧げものをわれらから受けたもうた。どうかわれらから 霊と肉におけるすべての穢れを取り去りたまえ。そしてあなたへの畏れのうちに，この秘跡を最後まで執り行うことを教え，われらの霊的意識における確かな確信のうちに，あなたの聖性に与かり，あなたの御子キリストの聖なる体と血とに一致し，それらを相応しくわれらのうちに抱き，生けるキリストをわれらの心に住まわれる方として保ち，われらが聖霊の神殿となることができるように。われらの神よ，然り，われらのうちの誰一人としてこの畏れおおき天上の秘跡に反する罪を犯すことなく，またそれらを相応しからず受け取ることにより，肉また霊を病める者となることのないように。むしろわれらの最後の吐息に到るまで，あなたの聖性への希望を，永遠なる生命の糧として，またあなたの御子キリストの恐ろしき裁きの座の前であって，親しき回答として相応しく抱くことができるように。いつかわれらもまた，あなたの御前で，永遠の昔より親しき交わりのうちにあるすべての聖なる者たちとともに，かの永遠の善に与かることができるように。それは，あなたを愛する者たちに，われらの主が備えられたもの」。

司祭は声を挙げて続ける

「神よ，あなたの憐れみによりて，われらを守り，救い，憐れみ，強めたまえ」 信徒「主よ，叶えたまえ」(以下同様に) 司祭「平和の天使，信篤き導き手，われらの霊と肉の守り手を，主に求めよう」 「われらの罪と過ちの，赦しと寛容を主に求めよう」 「われらの霊に善と益を，世には平和を主に求めよう」 「われらの生の残りの期間を平安と痛悔のうちに過ごすことができるよう，主に求めよう」 司祭「われらの生を，キリスト教徒としてのあり方で苦悩と恥なく送れるよう，そしてキリストの恐れ多き裁きの座の前で，善き答えができるよう，主に求めよう」 「信仰の一致，聖霊の交わりを求めつつ，われら自身とお互いを，そしてわれらの生命すべてを，われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ，あなたに」 司祭「天の父よ，われわれが畏れなく咎なくあなたを敢えて父と呼び，こう語るに相応しきものとなるよう，叶えたまえ」。

「主の祈り」：「天におられるわれらの父よ，あなたの名が聖とされんことを，御国の来たらんことを。御旨の天に行われるごとく，地にも行われんことを。われらの日ごとの糧を，きょう与えたまえ。われら人を赦したるがごとく，われらの罪を赦したまえ。われらを試みに引きたまうことなかれ。われらを悪より救いたまえ」。

司祭「国と力と栄光は，父と子と聖霊よ，あなたのもの，今もいつも世々とこしえに」 信徒「アーメン」。

「頭を垂れての祈り」：司祭「あなたがたすべてに平安があるように」 信徒「あなたの霊にも」 司祭「主に頭を垂れよう」 信徒「主よ，あなたに」

司祭黙禱：B「治め主なるわれらの主，憐れみの父にしてすべての慰めの神よ，あなたの御前に頭を垂れる者たちを祝したまえ。彼らを聖化し，保ち，力づけ，守り，あらゆる悪しき行いから遠ざけたまえ。彼らをすべての善に向けて一致させ，裁きを受けることなく，咎なく生命を与えるあなたの神秘に与かるに相応しき者となるよう，罪の赦しと聖霊の近づきのために」。

司祭「あなたの御一人子の恵み、憐れみ、人への愛を通して、あなたはその故に祝せられる、いと聖にして善き方、生命を与えるあなたの霊とともに、今もいつも世々としえに」 信徒「アーメン」
司祭黙禱：「主なるイエス・キリスト、われらの神よ、あなたの聖なる住まい、あなたの御国の栄光の玉座より、われらを見そなわしたまえ。来たりてわれらを聖化したまえ。いと高きところにおいて父とともに座せる方よ、あなたはわれらとともに、目に見えずともここに臨まれる。力強きその御手もて、あなたのいと淨き御体と尊き御血を献げることがを、われらのためまたわれらを通してすべての民のために、適わしきこととなさせたまえ。神よ、罪びとなるわたくしに憐れみ深くあらせたまえ（×3；ルカ 18.13）」。

「聖性唱」：司祭「身を謹もう。聖なるものは聖なる者に」 信徒「聖なるものは一、主は一、イエス・キリスト、父なる神の栄光のために。アーメン」。

拝領唱が歌われる。

「あなたがたは天にあって主を讃えよ。天のいと高きところにおいて主をほめよ。アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ」

「真なる人は永遠の記憶のうちに留められ、悪しき風評を恐れない。アレルヤ」

聖木曜日には「神の子よ、わたくしをあなたの神秘の宴に与るものとして受け入れたまえ。わたくしはこの神秘を、あなたに逆らう敵には口外しない。またユダのようにあなたに接吻することもしない。むしろ、あの罪びとのようにあなたに告白する。わが主よ、あなたが御国に来られるとき、わたしのことを思い起こしたまえ。アレルヤ」

聖土曜日には「いわば眠りから醒めたかのように主は目覚め、復活し、われらを救った。アレルヤ」

少しく拝礼した後、助祭は南門を通過して至聖所に入り、司祭の右側に座を占める。あらためて拝礼し、司祭にこう告げる（「パン割り」「両聖品の混淆」）¹⁴。

「主よ、聖なるパンを裂きたまえ」。

崇敬をもって、司祭は大きな聖パン「小羊」を4つの部分に分かつ。まず縦に二つの部分に裂く（右側にXC, KAが来る）。このXC, KAの部分を手で持ち、まずディスコスに置く。そして左手に持った部分すなわちIC, NIの部分に上下二つに分かち、ICの文字が印された部分をディスコスの上部に、NIの部分に左部に置く。今度はまだ分かつていなかったXC, KAの部分に上下二つに分かち、XCの部分にディスコスの下部に、KAの部分に同じく右部に置く。こうして四つの部分が十字を構成することになる。分かつあいだ、司祭は小声で次の祈りを唱える

司祭黙禱：「神の小羊、父の御子は引き裂かれ、分かつたれる。裂かれ得る方にして、しかし分かつたれぬ方よ、あなたは常に食物として仕え、しかし決して尽きることがない。あなたは、そこに与かる者たちを聖化する」

オリオンでカリスを指し示しながら、助祭は司祭に告げる

「主よ、聖なるカリスを満たしたまえ」。

司祭はICの文が記された部分を取り、これをもってカリスの上に十字を切りつつ、カリスの中に落とし、こう述べる

「聖霊こそ信の完成」。助祭「アーメン」。

パン裂きの後、司祭は自らの指をディスコスの上で拭う。

混淆の直後「生ける水」の儀式（ゼオンもしくはテプロータ）が続く¹⁵。

¹⁴ このあたり、パン裂きと両聖品の混淆に関しては、C. Kucharekによる前掲書 670-689頁を参照して補った。

¹⁵ 以下の部分（「ゼオン」と呼ばれる儀式）は、ハンガリーのギリシア・カトリック教会ではふつう行わ

助祭は小水壺に入った温水を司祭に渡し、こう述べる

「主よ、温水を祝したまえ」。

温水の壺を祝福しつつ司祭はこう述べる

「あなたの聖なる者たちの香りは祝される。今もいつも、世々としえに到るまで。アーメン」。

助祭は聖化されたぶどう酒に十字を切りつつ少量の水を注ぎ、こう述べる

「信の芳香、聖霊の充溢。アーメン」。

助祭は壺を元に戻し、司祭の傍らに立つ。

助祭は聖体拝領のまえに、祭壇を周回し、必要なら右手を洗う。司祭は助祭に向かってこう述べる

「助祭よ、近づくがよい」。

助祭は司祭の左側に来て頭を垂れ、赦しを請う。司祭は小羊の XC の部分を砕き、その一部を助祭に与える。司祭の手に接吻した後、右の手に載せた聖パンを拝領する準備をする。その右の手は左手の上に重ねられる。その間にこう述べる

「主よ、尊く聖なるわれらの主、神にして救い主なるイエス・キリストの体を与えたまえ」。

助祭の右手に小片を置きながら、司祭はこう述べる

「この尊く聖にしてまったく浄らかなるわれらの主、神にして救い主、イエス・キリストの体が、助祭に与えられる。罪の赦しのため、永遠なる生命のために」。

助祭は祭壇の背後に退き、司祭は小さく拝礼をして、別の XC の一部を取り、右手の親指と人差し指で捧げ持ち、こう述べる

「この尊く聖にしてまったく浄らかなるわれらの主、神にして救い主、イエス・キリストの体が、司祭なるわたくしに与えられる。わが罪の赦しのため、永遠なる生命のために」。

少しばかり頭を下げ、司祭と助祭（および信徒）は拝領前の祈りを述べる

「私は主を信じ、あなたが真に救い主、生ける神の子であることを信じる。あなたは罪びとたちを救うために世に来られ、わたくしはその中で第一の罪びと。神の子よ、わたくしをあなたの神秘の宴に与るものとして受け入れたまえ。わたくしはこの神秘をあなたに逆らう敵には口外しない。またユダのようにあなたに接吻することもしない。むしろ、あの罪びとのようにあなたに告白する。わが主よ、あなたが御国に来られるとき、わたしのことを思い起こしたまえ。治め主よ、あなたが御国に来られるとき、わたしのことを思い起こしたまえ。聖なる方よ、あなたが御国に来られるとき、わたしのことを思い起こしたまえ。わが主よ、あなたの聖なる神秘への与りが、わたしの裁きや断罪に転ずることなく、わが霊と肉体の癒しとならんことを。わが主よ、いま私が与るこのものが、あなたの真なるいと浄らかな肉であり、あなたの真なる生命を与える血であるということ、私は信じる。わたしがこれらをふさわしく身に受けることができるように、そしてわが罪の赦しまた永遠の生命となるように祈る。アーメン」。

司祭は深く拝礼し、次の言葉とともに主の体を食す

司祭黙禱：「わたくし、神の適わしからざる僕、司祭 N は、主なるわれらの神、そしてわれらの救い主なるイエス・キリストの、尊くいと聖にしていと浄らかなる御体に与かる。わが罪の赦しと、永遠の生命のため。アーメン」

深く拝礼したのち、次のように述べつつ杯から拝領する。

「わたくし、神の適わしからざる僕、司祭 N は、主なるわれらの神、そしてわれらの救い主なるイエス・キリストの、尊くいと聖にしていと浄らかなる御血に与かる。わが罪の赦しと、永遠の生命のため。アーメン」(「司祭、助祭の拝領」)

唇と杯の端を次のように述べつつ拭う

れない。

「見よ、これがわが唇に適い、わが悪は取り除かれ、わが罪は浄められた（イザヤ 6.7）」。

司祭ないし助祭は信徒の方に向き、声を挙げる

司祭（助祭）「神への畏れと信と愛をもって近づくがよい」

信徒「主の名によりて来たる者は祝される。われらに現れた主こそ神」。

司祭は聖体を持って信徒の方に向き「私は主を信じ」以下の祈りを唱えつつ、次のように述べながら、与かる者たちを祝福する

司祭黙禱：「神の適わしからざる僕 N は、主なるわれらの神、そしてわれらの救い主なるイエス・キリストの、尊くいと聖にしていと浄らかなる御体と御血に与からせる。罪の赦しと、永遠の生命のため。アーメン。見よ、これがあなたの唇に適い、あなたの悪は取り除かれ、あなたの罪は浄められた」（「信徒の拝領」）

司祭は聖体でもって信徒たちを祝し、声を挙げてこう述べる

司祭「神よ、あなたの民を救い、あなたが遣されたものを祝福したまえ」（『詩篇』二七九）

信徒（「拝領後の歌」）「幾年にも、わが主よ」「われらは真の光を見た。天の聖なる霊を受けた。真の信仰を見出した。分かれざる聖三位一体を崇めよう。これこそわれらを救われた方」（注：この句は聖霊降臨祭翌日「聖三位一体の祝日」朝課の「讚美のスティヒラ」冒頭である）

司祭は祭壇の方に向き、静かに述べる

司祭黙禱：「神よ、あなたは天の上にあつて讃えられ、あなたの栄光は全地に満つ」（詩篇 56.6）

深く拝礼し、杯およびその他を手に持ち、静かに述べる

司祭「われらの神は祝せられる」

信徒の方に向き、声を挙げる

「永遠の昔より今もいつも世々とこしえに」

信徒「アーメン」。

「感謝の歌」：「われらの唇があなたへの讃辞で満ちんことを、あなたの栄光を歌わんがために。あなたはわれらが、不死にして生命を与え聖なる天上の神秘に与ることを許された。あなたの秘跡により、われらを強めたまえ。この一日、あなたの真理を観想することができるように。アレルヤ」。

聖木曜日には「神の子よ、わたくしをあなたの神秘の宴に与るものとして受け入れたまえ。わたくしはこの神秘を、あなたに逆らう敵には口外しない。またユダのようにあなたに接吻することもしない。むしろ、あの罪びとのようにあなたに告白する。わが主よ、あなたが御国に来られるとき、わたしのことを思い起こしたまえ。アレルヤ」

司祭は奉献台へと聖体を戻し、ここで食しつつ、次の連禱を静かに唱える

「感謝の連禱」：司祭「真なる信徒たちよ、キリストの聖なる、いと浄らかにして不死、天上の生命を与えおそれ多き神秘に与り、ふさわしく主に感謝を捧げよう」

信徒は呼応する

信徒「主よ、憐れみたまえ」（以下同様） 司祭「神よ、あなたの憐れみによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」「この日一日の、完全な、聖性のうちなる、平安にして罪なき生活を求めつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」

信徒「主よ、あなたに」

司祭黙禱：「われらの主なる神よ、われらは、あなたの聖にして咎なく、不死にして天上的なあなたへの神秘への与かりゆえに感謝を献げる。これはわれらの霊と肉のため、聖化と癒しのためにあなたがわれらに与えられたもの。万物の治め主よ、あなたのキリストの聖なる肉と血への近づきを通して、われらのうちに消え去ることなき信と、見せかけでない愛とを目覚めさせたまえ、智慧の完成、われらの霊と肉の癒し、あらゆる悪の追放、あなたの命の完遂、そしていつか来たるあなたのキリストの恐るべき裁きの座の前で、親しく擁護を受けられることのために。あなたはわれらの聖性、われらは

あなたを讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに」 信徒「アーメン」。

え)「閉祭」の部

司祭または助祭は声を挙げる(アンボンの祈り)

司祭「平和のうちに散会しよう」 信徒「主の名によりて」 司祭「主に願おう」 信徒「主よ憐れみたまえ」

司祭は王門の前で声を挙げ、読み上げる

司祭「主よあなたは、あなたを祝す者を祝し、あなたにより頼む者を聖化される。あなたの民を救い、あなたの遺産を祝し、あなたの教会の完全性を強めたまえ。あなたの家の装いを愛する者たちを、聖化したまえ。彼らを神の力により讃え、あなたにより頼むわれらを打ち棄てたもうな。あなたの世界、あなたの教会、あなたの司祭、真なる信もつわれらの使徒的王～、軍隊、そしてあらゆる民に平和を与えたまえ。すべて善き賜物とすべて完全な贈り物は上より来たり、あなたから、真理の父より下る。われらはあなたを讃え、崇め、あなたに感謝を捧げる。父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに」。信徒「アーメン」 「主の名が今よりとしえに祝されんことを」(×3)

聖土曜日には「アーメン」を長く伸ばし、司祭が「主に願おう」と呼びかけ、ここからリティア「パンの祝福」(注(3)拙稿78頁)に入り、その後

「主の名が今よりとしえに祝されんことを(×3)」と合流する。

司祭は祭壇に赴き、静かに次の祈りを読み上げる

司祭黙祷：B「われらはまったき者とされ、それぞれの能力に応じて、われらの神キリストよ、あなたの救いの計らいの神秘を執り行い終えた。われらはあなたの死の記憶を保ち、あなたの復活の場面を目にした。われらは不死なるあなたの生命に満たされ、尽きることなきあなたの喜びを抱いた。どうか、来たるべき生涯にあっても、われらがすべて、この秘跡に相応しくあれるよう、叶えたまえ。初めなきあなたの父、いとも聖にして善き思いをもち、生命を与えるあなたの霊の恵みによりて、今もいつも世々としえに。アーメン」

司祭ないし助祭「叡智！」

信徒「ケルビムよりも尊く、セラフィムよりも類いようもなく栄えある方、あなたは神を、御言葉を、陣痛なくお産みになった。真なる神の母よ、われらはあなたを誉め歌う」

司祭「あなたに栄光あれ、キリスト・われらの神よ、われらの希望よ、あなたに栄光あれ」

信徒「栄光は父と子と聖霊に」「今もいつも世々としえに。アーメン」「主よ、憐れみたまえ」(×3)
「主よ、祝福を与えたまえ」

閉祭の祝福：司祭 B「死者のうちより復活したキリスト、真なるわれらの神よ、そのいとも浄らかなる母、聖にして誉れあり万物にまさって讃えられるべき使徒たち、聖なる大バジル、カッパドキアのカエサリアの司教、聖にして神の息吹を受けたわれらの師父たち、それにすべての聖人たちのとりなしにより、われらを憐れみ、われらを救いたまえ、あなたは善き方にして人を愛する神なれば」。

信徒「アーメン」。

司祭「主の祝福が、その恵みと人への愛とともにあなた方にあらんことを。今もいつも世々としえに」

信徒「アーメン」。

聖体礼儀の終了後、司祭はしばらく祭壇にとどまり、静かに次の祈りを唱える

「主よ、あなたはいま、言葉にしたがって平安のうちにあなたのしもべを務めから解いて下さる。わが両の眼は、あなたがすべての民の目の前に遣わされた救い主の姿を見た。異邦人の啓蒙のための光として、またあなたの民イスラエルには栄光を帯びた姿で来られた方を」。

「聖なる神、聖なる力、聖なる不死の者よ、われらを憐れみたまえ」(×3)～「主の祈り」

底本としたテキストには、続けて聖バジル典礼固有の唱句(トロパール,コンターク,神の母讃歌)が記載されている。

2) 先備聖体礼儀(教皇聖グレゴリオスの典礼, 聖水曜日)

序でも触れたように、ビザンティン典礼には、年間に通常用いられる「聖ヨアンネス・クリュストモス典礼」、年間に10回用いられる「聖バジル典礼」のほかに、「先備聖体礼儀」という典礼があり、これは受難節特有のもので、別名「聖グレゴリオスの典礼」とも呼ばれる。「信徒が受難節中の力を得られるように」と教皇グレゴリオス1世(在位590-604;東方典礼での記念日は3月12日)が考案したものとされ、聖週間には聖月、聖火、聖水曜日に行われる。このうち、聖水曜日の先備聖体礼儀を以下に翻刻する。この典礼の起源・次第については次のように説明される。

「東方教会では四旬節期間中、古くからの伝統に従い、土曜日、日曜日、聖母へのお告げの祝日(3/25)、聖木曜日、聖土曜日に限って聖体礼儀を執り行い、それ以外の日には讃美のいけにえの式だけで神をほめたたえていた。四旬節とは罪の痛悔と断食の期間であり、聖体礼儀はそれに相応しくないと考えられていたためであった。しかしながら、この長い期間を通じ、信徒たちがキリストの肉と血による霊的な力づけなく過ごすことのないように、ある定まった日には、週日であっても、その日の断食が終わった後、晩課の枠組みの中で、先行する日曜日に取り置いた聖体を拝受する仕組みが取り入れられた。先備聖体礼儀とは、こうして晩課に接続されたいけにえの式である。典礼上の式次第により、四旬節中の水曜日、金曜日、聖週間の最初の3日間〔聖月、聖火、聖水〕に行われる」¹⁶とある。また「その第1部では、晩課の聖入を伴い、聖書朗読をおこなう。スティヒラの間、司祭は先行する日曜日に聖変化させた聖体を奉献台に運び、その後聖入の行列においてこれを祭壇に戻す。第2部は、懇願連祷より聖体礼儀の次第にしたがい、聖体拝受をとまなう。聖変化はここでは行われぬ」¹⁷と説明される。以下この「先備聖体礼儀」の次第を追うことにしよう。

第9時課の挙行中、歌隊が「真福八端」を歌う間に、司祭と助祭とは聖体礼儀の衣を身に付け、洗手を済ませ祭壇の階の前に立つ。ここで司祭は第9時課の最後の祈禱と閉祭の祈りを述べ、しかし祝福は与えずに、そのまま祭壇の前に進み出て、低い声で始める：

「われらの神は永遠に祝せられる、今もいつも世々とこしえに。アーメン」。

「天の王、慰め主、真理の霊、すべてに遍在し万物を満たす方、あらゆる善の泉、生命の与え主、来たりてわれらのうちに住みたまえ。われらをあらゆる穢れから清めたまえ。善き方よ、われらの霊を救いたまえ」。

改めて司祭は助祭とともに十字を切り、述べる：

「栄光はいと高きところにいます神にあれ、地には平和、人々には善き思いのあらんことを」(×2)。

「主よ、わが唇を開きたまえ。わが口はあなたの栄誉を語り告げよう」(詩篇50.17)。

祭壇と十字架とに接吻する。助祭はイコノスタスの前に進み、声を挙げて歌う：

「祝福を与えたまえ」。

「父と子と聖霊の王国は祝せられる、今もいつも世々とこしえにいたるまで」

歌隊「アーメン」。続けて「来たれ、われらの王、われらの神に祈ろう。来たれ、キリスト・われらの王、われらの神に祈ろう。来たれ、伏し拝もう、そしてイエス・キリストその方、われらの王、われらの主、われらの神に祈ろう」。詩篇第103篇。「栄光は」「今も」「アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ、神よ、栄光はあなたに」。

司祭ないし助祭は声を挙げて大連祷を読む：

「平安のうちに主に願おう」

¹⁶ Emeljük föl szívünket!, 153. o., Nyíregyháza 2000.

¹⁷ Ivancsó István, Görög katolikus liturgikus kislexikon, 21-22, Nyíregyháza 2002.

歌隊は以下の句ごとに歌う：「主よ、憐れみたまえ」

「天の平和、われらの霊の救いのために主に願おう」 「全世界の平和、神の聖なる教会の栄え、われらすべての者の一致のために主に願おう」 「この聖なる家のため、また信と熱意と神への恐れをもってここに集い来る者すべてのために、主に願おう」 「われらの聖にして普遍なる牧者の長、～教皇のため、神を愛するわれらの～司教のため、浄らかなる司祭職にある者のため、全教会と民のために主に願おう」 「この町のため、すべての町、共同体、地域、そこに住む信徒たちのために主に願おう」 「気候の恵みある温順、大地の作物の豊かな実り、平和な日々のため、主に願おう」 「航行する者、旅路にある者、病める者、疲れたる者、飢える者たちのため、またこれらの者の解放のため、主に願おう」 「主がわれらをあらゆる心労、怒り、危険、欠乏から救って下さるよう、主に願おう」 「神よ、あなたの恵みによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「いとも聖にして浄らか、いとも祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」

歌隊：「主よ、あなたに」

司祭は声を挙げる：

「あらゆる栄光、崇敬、敬愛は、父と子と聖霊よ、あなたにこそふさわしい。今もいつも世々としえに」

歌隊：「アーメン」。

第18 カティズマ（詩篇 119 - 133）の第一部（119 - 123）が読まれる。その間に司祭は第1 アンティフォンの祈りを黙禱する：

「憐れみ深く恵みに満ち、永きにわたり忍耐し、大いなる憐れみもつわれらの主よ、われらの祈りをあなたの耳に聞き届け、われらの願いの言葉に意を注ぎたまえ。われらに向けてのあなたの善き思いに徴を与えたまえ。われらをあなたの道に導かせたまえ、われらがあなたの真理のうちに歩めるように。われらの心よ、あなたの聖なる名を畏れることを喜びとせよ。あなたは偉大な方にして、数々の奇跡を起こされる。あなたこそ唯一なる神。主よ、神々のなかで、あなたに似たものはない。あなたは憐れみにおいて力強く、力のうちに善き思いを示し、あなたの聖なる名に信頼するすべての人々を助け、慰め、救われる」（詩篇 85 篇）。

司祭ないし助祭は声を挙げて小連禱を述べる：

「繰り返して平安のうちに主に願おう」 信徒「主よ、憐れみたまえ」（以下司祭の各導句に続ける）
司祭「神よ、あなたの恵みによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「いとも聖にして浄らか、いとも祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ、あなたに」

司祭：

「権威、国、力そして栄光はあなたのもの、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに。アーメン」。

第18 カティズマ（詩篇 119 - 133）の第二部（124 - 128）が読まれる。その間に司祭は第2 アンティフォンの祈りを黙禱する：

「主よ、どうかわれらをあなたの悲しみのうちに責めることなく、あなたの憤りのうちに叱責することなかれ（詩篇 37 篇 2）。むしろ、おおわれらの霊の医師にして癒し手なる方よ、あなたの憐れみにより、われらとともに行いを為したまえ。われらをあなたの意向の波止場に向けて導かせたまえ。われらの心の眼を照らしたまえ、あなたの真理を知ることができるように。きょうこの日の残りの部分とわれらの生涯のすべての時間を、われらが平和のうちに罪なく満たせるよう、われらに叶えさせたまえ。聖なる神の母とあなたのすべての聖なる者たちの祈りを通して」。

司祭ないし助祭は小連禱を述べる：

「繰り返して平安のうちに主に願おう」 信徒「主よ、憐れみたまえ」（以下司祭の各導句に続ける）

司祭「神よ、あなたの恵みによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「いと聖にして浄らか、いと祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ、あなたに」

司祭：

「あなたは善き方にして人を愛する神、われらはあなたをほめ讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに．アーメン」．

第 18 カティズマ（詩篇 119 - 133）の第三部（129 - 133）が読まれる．その間に司祭は第 3 アンティフォンの祈りを黙禱する：

「われらの主なる神よ、われら、罪人にして相応しからざるあなたのしもべを思い起こしたまえ、われらが聖にして崇められるあなたの名を助けに呼び求めるときに．あなたの憐れみを待ち望むわれらを貧しき者となさしめたまうな．むしろ主よ、率直なるわれらの懇願を叶えたまえ．われらの心のすべてを挙げてあなたを愛し、恐れ、すべてにおいてあなたの意向を果たすことができるようにさせたまえ」．

司祭ないし助祭：

「繰り返して平安のうちに主に願おう」 信徒「主よ、憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける)

司祭「神よ、あなたの恵みによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「いと聖にして浄らか、いと祝せられし栄えあるわれらの王妃、神の母にして常に処女なるマリアを、すべての聖人とともに思い起こしつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 信徒「主よ、あなたに」

司祭：

「あなたはわれらの神にして憐れみと救いの神、われらはあなたをほめ讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々としえに．アーメン」．

歌隊は「主よ、あなたに向かって」および「<主よあなたに向かって>の後のスティヒラ」を歌う．

「主よ、あなたに向かってわたしは叫ぶ、聞き届けたまえ．わたしの祈りの声に耳を傾けたまえ、わたしはあなたに向かって叫ぶ．主よ、聞き届けたまえ．わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように、立ち昇らんことを．わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる．主よ、聞き届けたまえ」．

「主よあなたに向かって」の後のスティヒラ（聖水曜日の典文）：

「わが霊を牢獄より引き出したまえ、あなたの名を讃えることができるように」

「おとめの子よ、罪深き女はあなたを神と知り、すすり泣きのうちに祈りつつ、涙によって罪を赦され、こう言う．<編んだ髪をわたしが解くように、どうかわが罪から解き放ちたまえ．あなたを真に揺らくことなく愛し、徴税人のごとく、あなたに祈り求めるこの女を愛したまえ、人を愛するわが恩人よ！>」

「真理に就く人々がわたしを待つ、あなたがわたしに善き報いを下さるまで」

「罪深き女は高価な香油に涙を混ぜ、あなたの御足に接吻するうちに、咎なきあなたの御足を濡らした．その瞬間、あなたは彼女に浄めを与えた．あなたはわれらのために苦しむ方、どうかわれらにも救しを与え、われらを救いたまえ！」．

「主よ、深き処よりあなたに向かって叫ぶ．主よ、わが言葉を聞き届けたまえ」

「罪深き女があなたの許へ油を持ち来たったのとちょうど同じとき、あなたの弟子は律法学者らと密談していた．先の女は喜んであなたに高価な油を注ぎかけたのに、あなたの弟子は、その価値の計り知れない方を売り飛ばそうと模索していた．女はあなたを治め主と認めたが、弟子は治め主から逃亡しようとした．女は解放されたが、ユダは敵の囚われ者となった．貪欲は虚しかったが、痛悔は大きかった．わたしのために苦しむわがイエスよ、この痛悔をわたしにも与えたまえ、そしてわたしを救いたまえ」．

「あなたの耳に、わたしの願いの言葉が届きますように」

「おお、ユダの惨めさのなんと大きいことか！ 彼は罪の女があなたの御足に接吻するのを見て、心の中で裏切りの接吻をたくらんだ。女は編んだ髪をほどいたが、衝動がユダをつまづかせた。かくして彼は香油の代わりに腐敗した匂いを放つ悪を運んだ。嫉妬心は有益なものを選び取ることができない。おお、ユダはなんと惨めなことか！ われらの神よ、われらの霊を彼の運命から救いたまえ！」

「主よ、もしあなたが罪に目を留められるなら、誰があなたの前に立てようか？ しかし恵みはあなたの許にある」

「罪深き女は香油をかうべく奔走し、高価な香料を持ち来たった、慈しみの主にその香を振りかけるために。そして香油の作り手に向かってこう述べた。＜わたしが犯したすべての罪を拭い去ってくださった方に塗るために、わたしに香油を下さい！＞」

「主よ、わたしはあなたの掟のゆえに、あなたに希望を置く。わが霊はあなたの言葉のゆえに請い願う。わが霊は、主により頼む」

「罪に堕ちた婦人はあなたを見て、救いの小船よ、涙を混ぜた香油をもって、あなたに香油を塗り、こう願った。＜わたしに目を注ぎたまえ、あなたの力のうちには罪の赦しがあるから！ わたしを見つめたまえ、あなたは罪人の回心を待ち望んでおられるから。主よ、あなたの憐れみによって、わが罪の嵐よりわたしを救いたまえ！＞」と。

「朝の見張りのときから夜更けまで、イスラエルは主により頼む」

「きょう、キリストはファリサイ人の家へ来た。罪ある婦人は彼の足許に身を屈め、こう叫ぶ。＜わたしに目を注ぎたまえ、わたしは罪に沈んでいます。そしてわが行いのために絶望しています。あなたの善性をして、どうかわたしを憎まされたもうな。主よ、わたしに赦しを与え、わたしを救いたまえ！＞」

「憐れみは主にあり、贖いは主にあつて豊か。主はイスラエルをすべての悪から解放される」

「罪深き女は治め主に向かって髪を解き、ユダは律法学者らに両手を開いた。女は罪の赦しを得るために、ユダは銀貨を手に入れるために。それゆえわれらは、あなたに向かってこう叫ぶ。＜われらのために売り飛ばされたわれらの解放者よ、あなたに栄光！＞」

「すべての国民は主を讃えよ、すべての民よ、彼を讃えよ」

「悪臭を放つけた婦人が近づき、あなたの足許に、おお救い主よ、涙を注ぎあなたの憐れみを請い求める。＜どうしてわたくしにあなたを見ることなどできましょう、主よ？ あなたは自ら罪人を救うために来られた方。あなたはラザロを死後4日目に墓から蘇らせた。どうか、死したこのわたくしを深い淵より立ち上がらせたまえ。主よ、窮状にあるこのわたしを受け入れ、救いたまえ＞」

「主の憐れみはわれらの上に増し、彼の正義はとこしえに留まる」

「自らの生き方のゆえに絶望に陥り、倫理性に関して評判悪しき婦人は、あなたの許に香油を携えて訪れ、こう言った。＜どうかわたし、この淫らな女を退けたもうな。あなたはおとめより生まれた方。どうかわたしの涙を蔑みたもうな。天使たちの喜びよ。むしろわたし、この痛悔する女を受け入れたまえ。主よ、あなたはその大なる憐れみのゆえに、痛悔する者を罪のうちに見棄ておかない＞」

「栄光は父と子と聖霊に」。「今もいつも世々としえに至るまで、アーメン」。

「主よ、おびたしい罪に溺れた女は、あなたの神性を知るや、油を携える者たちの列に加わり、それに先立ってあなたの葬りのために香油を手にしてやって来た。＜ああ、このわたし！＞、彼女は泣きながらこう叫んだ。＜夜のように罪のおびたしさと、過ちの闇の厳しい追跡がわたしを圧する。しかしわたしの涙の小川を受け取りたまえ。この涙は、いわば雲から降るかのごとくに、滴り流れる。わが心より起こるあえぎに耳を傾けたまえ。あなたは言葉に尽くせぬ善き意向により、天の端を傾けた方。わたしは接吻をもっていと聖なるあなたの足を覆い、編んだ髪の手でもって何度も拭う。わたしの罪のおびたしさを、あなたの裁きの深さを誰が述べ尽くせようか、わが救い主、霊の守り手よ。あなたのしもべを蔑ろになしたもうな、あなたの憐れみは尽きることがない＞」。

この間に司祭は香を振り、聖体櫃より主の聖体を取り出し、奉献台に移す。杯にぶどう酒と水を注ぎ、

沈黙のうちに慣例に則ってこれを覆い、「栄光は」「今も」の間に聖人の祈りを述べる：

「万物の治め主よ、夕に朝にそして昼に、われらはあなたを讃え、崇め、あなたに感謝を捧げ、人を愛するわれらの主よ、あなたに願う。善き香りのごとくに、われらの祈りがあなたの御顔のまえに届かんことを。そしてわれらの心が悪しき言葉や思いに傾くことを許したまうな。むしろ、われらの霊に抗して企みをなすすべての物からわれらを解放したまえ。おお主よ、主よ、われらの眼はあなたに注がれ、われらはあなたのうちに希望を置く。われらの神よ、われらを貧しき者となさしめたまうな。すべて栄光、崇敬、敬愛はあなたにこそ相応しい、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえにいたるまで」。

聖人は通常の聖体礼儀の場合と同様に行われる。

助祭「主よ、聖人を祝したまえ」

司祭「あなたの聖なるもの入堂は祝される、永遠の昔より今もいつも世々とこしえに。アーメン」

司祭ないし助祭は声を挙げる：

司祭「叡智！ 真なる信徒たちよ！」

歌隊：

「神の穏やかな光、聖にして幸い、不死なる天の父なる神の栄光の輝き、イエス・キリスト！ 太陽のやすらいにまみえ、夕べの光を目にして、われらは父、子、聖霊なる神を祝す。神の子よ、あなたは、われらがいついかなる時にも聖なる声もて歌うにふさわしき方、あなたは世に生命を与える。それゆえにこそ、この世もあなたを讃える」。

司祭はこの間に祭壇の背後にある座席に赴く。歌が歌われる間に助祭は次のように祝福を与える：

「謹んで聴こう。あなたがたすべてに平安あれ。叡智！ 謹んで聴こう」

歌隊は第1プロキメンを歌う。第1プロキメン(第4調)「あなたがたは天の神に感謝せよ、その憐れみは永遠。信徒は同じ句全体を繰り返して歌う。

司祭ないし助祭：「叡智！」 朗読者「～書の朗読」 司祭ないし助祭：「謹んで聴こう！」 朗読者は朗読箇所を朗読する。第1朗読：『出エジプト記』2.11-22。

次いで歌隊は第2プロキメンを歌う。第2プロキメン(第4調)「主よ、あなたの憐れみは永遠、あなたの手の業を取り去りたもうな。信徒は同じ句全体を繰り返して歌う。

助祭「命じたまえ」。司祭は香炉を手に取り、燭台を左手に持って、まず祭壇の方に向かって歌う：司祭「叡智！ † 真なる信徒たちよ！ キリストの光は†すべての人を照らす！」。

朗読者「～書の朗読」 司祭は信徒に香を振る。司祭ないし助祭は述べる：「謹んで聴こう！」 ここで規定の聖書箇所が朗読される：第2朗読：『ヨブ記』2.1-10 終わりに：「あなたに平安！」「叡智！」。その後、司祭と助祭は祭壇の階の前に並び立ち、詩篇唱句の歌唱を始める。歌の間、彼らは立つ。歌隊はその間ひざまずいて聞く。

1「わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように立ち昇らんことを。わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる」。

司祭はひざまずき、信徒は立って繰り返す(以下繰り返す)：

信徒「わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように立ち昇らんことを。わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる」。

2「主よ、あなたに向かってわたしは叫ぶ、聞き届けたまえ。わたしがあなたに向かって叫ぶとき、わが言葉に耳を傾けたまえ」。

信徒「わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように立ち昇らんことを。わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる」。

3「主よ、わが口には守りを、わが唇には防ぎの扉を」。

信徒「わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように立ち昇らんことを。わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる」。

4「どうかわが心をして悪しき行いに傾かせず、わが罪の弁明をさせたもうな」。

信徒「わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように立ち昇らんことを。わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる」。

司祭「わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように立ち昇らんことを」。

全員が立ち上がり、声を合わせて：

信徒「わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる」。

「わが祈りが、あなたの御顔の前に立つ香の煙のように立ち昇らんことを。わが両の手は、夕べの生贄として差し上げられる」。

司祭は助祭とともに祭壇の階の前で3度完全な拝礼を行う。

聖週間中にはこの後、プロキメン、使徒書、福音も読まれる：

司祭「聖なる福音を聴くのにふさわしくあれよう、平安のうちに主に祈り求めよう」 信徒「主よ憐れみたまえ、憐れみたまえ」 司祭「あなたがたすべてに平安があるように」 信徒「あなたの霊にも、あなたの霊にも」 司祭「叡智！ 真なる信徒たちよ、聖なる福音を聞こう。聖～福音の朗読」 信徒「栄光あれ、主よ、あなたに栄光あれ！」 司祭「謹んで聴こう！」。

福音書朗読：聖水曜日はマタイ 26.6-16 信徒「栄光あれ、主よ、あなたに栄光あれ！」

司祭ないし助祭は二重連禱を歌う：

「われらすべて、まったき心・まったき霊でもって語ろう！」 歌隊「主よ憐れみたまえ」(以下司祭の各導句に続ける) 司祭「われらが全能の主、われらの師父たちの神、われらはあなたに祈る、われらに耳を傾け憐れみたまえ」 「神よ、あなたの大いなる憐れみによって、われらを憐れみたまえ。われらはあなたに願う、われらに耳を傾けわれらを憐れみたまえ」 歌隊「主よ憐れみたまえ(×3)」(以下司祭の各導句に続ける)

司祭黙禱：

「われらの主よ、われらの神よ、あなたのしもべより、この篤き嘆願を受け取りたまえ。そしてあなたの憐れみの豊かさにより、われらを憐れみたまえ。われらと、あなたの恵みを待ち望むあなたのすべての民の上にあなたの憐れみを送りましたまえ」。

司祭ないし助祭：

「さらに、神を愛するわれらの司教～のため、われらの霊的父のため、そしてキリストにおけるあらゆるわれらの兄弟たちのために願おう」 「さらに、ここに集いあなたから大いなる豊かな恵みを待ち望む民のため、われらの恩人のため、また真なる信仰をもつすべてのキリスト教徒のため、主に願おう」

司祭は声を挙げる：

「あなたは憐れみ深く人を愛する神、父と子と聖霊よ、われらはあなたを讃える、今もいつも世々とこしえに」 歌隊「アーメン」。

司祭ないし助祭は以下の懇願を述べ、歌隊はそれに「主よ憐れみたまえ」と応じる：

「求道者の連禱」：「求道者よ、主に向かって祈ろう」 「信徒たちよ、求道者のために祈ろう、主が彼らを憐れんでくださるように」 「彼らが、真理の言葉へと教え導かれるように」 「彼らに真理の福音が開示されるように」 「彼らが聖にして普遍、使徒継承なる教会と一致するように」 「神よ、あなたの憐れみによりて、彼らを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「求道者よ、主に頭を垂れよ」 歌隊「主よ、あなたに」

司祭黙禱：

「神よ、われらの神よ、万物の創造者にして創り主よ、あなたはすべての人が救われ、真理の認識に到ることを望まれる。どうか求道者なるあなたのしもべに目を注ぎたまえ。どうか彼らをいにしへの過ち、敵の欺きより解放したまえ。彼らを永遠の生命に招き、彼らの霊と肉体を照らしたまえ。彼らを、あなたの聖なる名を助けに呼び求める霊的な群れに加えたまえ」。

声を挙げて：

「彼らもまた、われらとともにいと高きあなたの名を讃えんことを、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 歌隊：「アーメン」

司祭ないし助祭：

「求道者よ、こぞって去るがよい。求道者よ、去るがよい。求道者よ、みな去るがよい。求道者の誰も残らぬように。信徒たちよ、みなこぞってまた再び、平安のうちに祈ろう」 歌隊：「主よ憐れみたまえ」

ただし四旬節の中央の水曜日からは上記の部分は省略する。声を挙げての部分の後、司祭もしくは助祭は次の連禱を歌う：

「求道者よ、こぞって去るがよい。啓蒙者らよ、皆こぞって去るがよい。啓蒙者らよ、主に向かって祈るがよい」

歌隊は懇願に応じる：「主よ憐れみたまえ」（以下同様に）

「われら信徒は、照らしと受洗に向けて備える兄弟たちのために、また彼らの救いのために主に向かって祈ろう」「われらの主、われらの神が彼らを強め、力づけて下さらんことを」「主が神の認識と信仰の光をもって彼らを照らしたまわんことを」「彼らを相応しき時に、再生の泉、罪の赦し、正義の衣に適わしき者となさせたまえ」「水と聖霊によりて、彼らを新たに生まれさせたまえ」「信のうちに完徳を彼らに授けたまえ」「彼らを、主の聖なる選ばれた群れに加えたまえ」「神よ、あなたの恵みによって、彼らを救い、憐れみ、守り、強めたまえ」「啓蒙者よ、頭を主に垂れよ」
歌隊：「主よ、あなたに」

司祭黙禱：

「われらの治め主よ、受洗に向けて備え、罪の染みを取り除くことを望む者たちに、あなたの御顔を輝かせたまえ。彼らの理性を照らし、信のうちに彼らを力づけ、希望のうちに彼らを強め、愛のうちに完全なものとなさせたまえ。彼らをあなたのキリストの浄き一員となしたまえ、主はわれらの霊のため、自らを贖いとして与えられた」。

声を挙げて：

「あなたはわれらの照らし、われらはあなたをほめ讃える、父と子と聖霊よ、今もいつも世々とこしえに」 歌隊：「アーメン」。

司祭ないし助祭：

「啓蒙者よ、こぞって去るがよい。啓蒙者よ、去るがよい。求道者よ、みな去るがよい。求道者の誰も残らぬように。信徒たちよ、みなこぞってまた再び、平安のうちに主に向かって祈ろう」 歌隊：「主よ憐れみたまえ」

「信者の連禱」：

司祭は信徒礼儀の第1祈禱文を述べる：

「偉大にして祝される神よ、あなたは生命を与えるキリストの死を通してわれらを腐敗から非腐敗性へと導いてくださった。われらの思いのすべてを、死をもたらす苦しみの惑溺より解放したまえ。善き舵取り手として内なる神慮をわれらの上に働かせ、われらの目が躓きの視界より遠ざけられ、虚しき言説の前に耳は閉ざされ、舌は相応しからざる言葉から浄く保たれるように。主よ、あなたに栄光を歌うわれらの唇を浄めたまえ。われらの両手が悪しき行いとは無縁なまま、ただあなたの前に親しきものとなるよう、叶えたまえ。そしてわれら共同体の成員すべてとわれらの思いをあなたの恵みによって力づけたまえ」。

司祭ないし助祭：

「神よ、あなたの恵みによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 歌隊：「主よ憐れみたまえ」

司祭ないし助祭：

「叡智！」

司祭：

「すべて栄光，敬愛，崇拜はあなたにこそ相応しい，父と子と聖霊よ，今もいつも世々としえに」

歌隊：「アーメン」

司祭ないし助祭：

「繰り返して平安のうちに主に願おう」 歌隊：「主よ，憐れみたまえ」

司祭は信徒礼儀の第2 祈祷文を述べる：

「聖にして万物にまさり善き方なるわれらの治め主よ，われらはあなたに願う，あなたは恵みにおいて豊かなる方，どうかわれら罪人らに対して憐れみ深くあらせたまえ．われらをしてあなたの御一人子，われらの神，栄光の王を拝受するに相応しきものとさせたまえ．見よ，いまこのときに，主の染みなき体と生命を与える血が凱旋し，天上の群れなす軍勢が目に見えぬ仕方で随伴し，この神秘に満ちた祭壇へと移し変える．われらが裁きを受けることなくこの聖体に与かり，それによって霊的に照らされ，真理と昼の子らとなることを叶わしめたまえ」．

司祭ないし助祭：

「神よ，あなたの恵みによって，われらを守り，救い，憐れみ，強めたまえ」 歌隊：「主よ憐れみたまえ」

司祭ないし助祭：

「叡智！」

司祭：

「あなたはキリストとともに祝された方，あなたのキリストの賜物により，いとも聖にして善性に満ち，生命を与えるあなたの霊とともに，今もいつも世々としえに至るまで」． 歌隊：「アーメン」．

信徒の歌隊は引き続き次のように歌い，司祭は下記にしたがい，遅れて小声で述べる：

「いま天の力が，目に見えぬ仕方でわれらとともに仕え，栄光の王が入られる．見よ，聖なる秘義のいけにえが，天使から委ねられる．生ける信と愛とをもって，われらは近づこう．永遠の生命に与る者となるために．アレルヤ，アレルヤ，アレルヤ！」

歌隊の歌の間に司祭もしくは助祭は祭壇と聖体とに香を振る．祭壇に赴き，腕をひろげて「いま天の力が」と述べる．その後沈黙のうちに大聖入，主の聖体の移置，覆い，香振り，三度の拝礼（痛解）が行われる．

司祭ないし助祭は，以下の懇願を述べ，これに歌隊は「主よ憐れみたまえ」と応じる．

完遂連禱 「われらの夕べの願いを，主に向けてまっとうしよう」 「捧げられ，予め聖化された尊い賜物のゆえに，主に向かって願おう」 「われらの恵み深き神が親しき霊的な香りとして，聖なる天上的で霊的な祭壇へとこれらを受け入れ，われらに神的な恵みと聖霊の賜物とをお送りくださるよう，主に向かって願おう」 「われらをあらゆる煩い，怒り，窮乏より救ってくださるよう，主に向かって願おう」．

歌隊は最後の「主よ憐れみたまえ」を長く伸ばし，その間に次の司祭黙禱が読み上げられる．

司祭黙禱：

「言葉には尽せず目には見えぬ幾多の奇跡の神よ，あなたのうちに理性と叡智の宝は隠れ，あなたはこの神的な仕えの完遂をわれらに啓示し，あなたの溢れる人間愛のうちに，われら罪人をして，われらの罪また民の過ちのためにわれらが奉獻といけにえをあなたに捧げるよう，定められた．自らは目に見えぬわれらの王，数え切れぬ，偉大なる，比類なく栄光に満ち，驚くべき幾多の業を成し遂げられる方よ，われら，相応しからざるあなたのしもべらに目を注ぎたまえ．われらはこの聖なるあなたの祭壇，ケルビムらによって構成されたあなたの玉座の前に立つ．ここにはあなたの御一人子にしてわれらの神が，このわれらの前に置かれた恐るべき秘密のうちに安らわれる．われらとあなたの忠実なる民すべてを，あらゆる霊的な不浄性より解放したまえ．それなしには済まされぬあなたの聖性を

もって、われらの肉体と霊とを聖化したまえ。浄らかなる意識もて、謙遜に満ちた顔と光を受けた心もて、この神的なる聖性をわれらが拝受することができるように。それによりわれらが生命を受け、キリストその方、われらの真なる神と一致できるように。キリストはこう仰せになった。＜わが体を食し、わが血を飲む者はみな、わがうちに留まり、わたしもその人のうちに留まる＞と。こうして主よ、あなたの御言葉がわれらのうちに住まい、悪魔の罪深き言葉、行いあるいは過てる考えへと誘う誘惑よりわれらが解放され、あなたのいと聖にして崇めらるべき霊の神殿となり、あなたの前で、永遠の昔より慈しみのうちに立つあなたの聖なる者たちと一致して、われらに約束された数々の永遠なる恵みを獲得することができるように」。

司祭ないし助祭は連禱を続ける。歌隊は最初の懇願には「主よ憐れみたまえ」、以降のものには「主よ、あなたに」と応じる。

「神よ、あなたの恵みによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「この夜を通して、完徳のうちに、聖性ととともに、平安に罪なく過ごせるよう、主に求めよう」 「平和の天使、信篤き導き手、われらの霊と肉の守り手を、主に求めよう」 「われらの罪と過ちの、赦しと看過を主に求めよう」 「われらの霊に善と益を、世には平和を主に求めよう」 「われらの生の残りの期間を平安と痛悔のうちに過ごすことができるよう、主に求めよう」 「われらの生を、キリスト教徒としてのあり方で苦悩と恥なく送れるよう、そしてキリストの恐れ多き裁きの座の前で、善き答えができるよう、主に求めよう」 「信の一致、聖霊の親しさを求めつつ、われら自身とお互いと、われらの生涯のすべてをわれらの神なるキリストに捧げよう」 歌隊：「主よ、あなたに」

司祭：

「われらの主よ、信頼をもってまた裁きを受けることなく、天の神よ、われらが敢えてあなたをわれらの神と名づけ、こう語ることを適わしめたまえ」。

司祭は静かに両腕をひろげて、歌隊は歌をもって

「主の祈り」：「天におられるわれらの父よ、あなたの名が聖とされんことを。御国の来たらんことを。御旨の天に行われるごとく、地にも行われんことを。われらの日ごとの糧を、きょう与えたまえ。われら人を赦したるがごとく、われらの罪を赦したまえ。われらを試みに引きたまうことなかれ。われらを悪より救いたまえ」。

司祭は声を挙げて

「国と力と栄光は、父と子と聖霊よ、あなたのもの、今もいつも世々とこしえに」 歌隊：「アーメン」。

司祭は祝福を与える：

司祭「あなたがたすべてに平安があるように」 歌隊：「あなたの霊にも」 司祭ないし助祭：「主に頭を垂れよう」

歌隊は次の祈りが静かに読み上げられる間、こう伸ばす：

「主よ、あなたに」

司祭は低く祈る：

「われらの神よ、あなたは唯一善き方にして憐れみ深い。あなたはいと高き処に住まい、身を低くする者をあなたの心に適うものとされる。どうかその憐れみ深き目を以ってあなたのすべての民に目を注ぎ、彼らを守りたまえ。裁きを受けることなく、生命を与えるあなたのこの神秘を自らのうちに抱くことを、われらに適わしめたまえ。われらはあなたの前に頭を垂れて立ち、あなたから豊かな恵みを待ち望む」。

洗手の間、声を挙げて

「あなたの御一人子の恵み、憐れみ、人への愛を通して、あなたはその故に祝せられる、いと聖にして善き方、生命を与えるあなたの霊とともに、今もいつも世々とこしえに」

歌隊は次の祈りが静かに読み上げられる間、こう伸ばす：「アーメン」。

司祭は洗手の後、両腕をひろげ静かに祈る：

「主イエス・キリスト、われらの神よ、あなたの聖なる住まい、あなたの王国の栄光の玉座よりわれ

らに目を注ぎたまえ。来たりてわれらを聖化したまえ。あなたは御父とともにいと高き処に座し、かつここに、目に見えぬあり方でわれらとともにおられる。その力強き御手もて、われらをして、あなたのいと浄らかなる御体と尊き御血を、われらを通してすべての民に与えるに相応しきものとなさせたまえ」。

胸を打ちながら三度述べる：

「神よ、罪人なるわたくしに憐れみ深くあらせたまえ」。

司祭ないし助祭：

「身を謹もう」。

司祭ないし助祭は主の聖体を掲げて

「先備された聖なるものは聖なる者に」

歌隊：「聖なるものは一、主は一、イエス・キリスト、父なる神の栄光のために。アーメン」。

聖体拝領前の祈り

「主がいかに善き方であるか、味わい、見よ！」「アレルヤ」(詩篇 33・9)。

歌隊の歌の間、司祭は奉獻された小羊を裂き、慣例に則ってこれを置き分けつつ述べる：

「神の小羊、父の御子は屠られ、分かたれる。彼は屠られうるが決して分かたれ得ず、常に食物として仕えつつも、決して尽されることなく、そのうちに与かる者たちを聖化する方」。

小羊の上部を取って杯の上で十字を切り、これを杯に入れて述べる：

「聖霊への信の完成」。

杯を覆い、拝領前の祈りを述べ、主の聖体を自ら次の言葉とともに食す：

「わたくし、神の相応しからざるしもべ、司祭 N は、主なる神にしてわれらの救い主なるイエス・キリストの、尊くいと聖にしていと浄らかなる体に与かる、わが罪の赦しと永遠の生命のために。アーメン」。

その後杯に与かるが祈りは加えない。聖体を杯に入れ、覆いを懸け、信徒の方に向き：

「近づくがよい」

歌隊：「わたしは主を讃える、いついかなる時にも。アレルヤ！」

信徒の拝領が続く。これが済むと司祭は静かに祭壇に戻り、杯とディスクス、それに覆いを手に取って低い声で：

「神は祝される、神はわれらを照らし、聖化された」。

その後信徒の方に向き、祝福を与える：

「永遠の昔より、今もいつも世々としえに至るまで」

歌隊：「アーメン。われらの神なるキリスト、われらはあなたに感謝を捧げる。あなたはわれらに、あなたのいと聖なる体と、罪の赦しのため全世界に注がれた尊い血に、救いのための配慮による聖なるあなたの神秘として与かるのに相応しきものとされた。アレルヤ！」

司祭は奉獻台に聖体を移し、ここで(残った)聖体を食し、次の祈りを述べる：

感謝連祷 司祭「真なる信徒たちよ、キリストの聖なる、いと浄らかにして不死、天上の生命を与えおそれ多き神秘に与り、ふさわしく主に感謝を捧げよう」 歌隊：「主よ、憐れみたまえ」(以下同様)

「神よ、あなたの恵みによって、われらを守り、救い、憐れみ、強めたまえ」 「この日一日の、完全な、聖性のうちなる、平安にして罪なき生活を求めつつ、われら自身とお互いを、そしてわれらの生命すべてを、われらの神なるキリストに献げよう」 歌隊：「主よ、あなたに」。

司祭黙禱：

「われらの救い主、われらすべての神よ、われらはあなたに感謝を捧げる、われらに与えられた恵み、あなたのキリストの聖なる体と血への与かりのゆえに。人を愛するわれらの治め主よ、われらはあなたに願う、われらをあなたの御翼の陰で守りたまえ。われらの肉体的また霊的なる照らしのため、また天上の王国の嗣業を確かなものとするために、われらの最後の息吹に到るまで、あなたの聖なる秘

跡をわれらのうちに相応しく抱くことができるように．あなたはわれらの聖性，われらはあなたを讃めたたえる，父と子と聖霊よ，今もいつも世々としえに到るまで．アーメン」．

司祭もしくは助祭：「平和のうちに散会しよう！」

歌隊：「主の名によりて」

司祭もしくは助祭：「主に願おう」

歌隊：「主よ，憐れみたまえ」．

司祭はアンボンでの祈りを読み上げる：

アンボンでの祈り「全能の治め主よ，あなたはすべての被造物を，叡智をもって創造された．あなたは，言葉に尽くしがたき計らいと善き思いのうちにわれらを抱き，われらの霊と体の浄めのため，悪しき氣質の統制のため，復活の希望の確証のため，この恵みに満ちた大齋の日々にわれらを据えられた．そして40日が満ちた後，あなたの親しきしもべであるモーゼに，石版に神の手で記した律法を与えられた．おお善き方よ，われらにも，善き闘いを闘い抜き，大齋の走路を走りぬき，信を咎なく保ち，目に見えぬ怪物の頭を打ち砕き，罪に対する勝利者となって，裁きを受けることなく聖なる復活に到達し，讃美することができるように．いと尊くいと高きあなたの名は祝せられ，讃め称えられる，父と子と聖霊よ，今もいつも世々としえに」．

歌隊：「アーメン．主の名は今よりとしえに祝されよ」(×3)

司祭は祭壇に赴き，低く次の祈りを読む：

「われらの主，われらの神よ，あなたはわれらをいと聖なるこの日に生かしめ，畏れ多きあなたの神秘に与らせてくださった．われらをあなたの霊的な群れと一致させ，あなたの王国の嗣業となさせたまえ．今もいつも世々としえに到るまで．アーメン」．

歌隊：は詩篇第33篇を読む．その後

「神の母よ，あなたを讃えることはいと相応しきこと，幸いなる方にして染み咎なく，われらの神の母となられたあなたを」

司祭もしくは助祭：「叡智！」

歌隊：「ケルビムより浄らかにして，セラフィムよりも，たぐいようもなくあなたは讃め称えられる．あなたは神を，御言葉を，苦しみなくお産みになった．真なる神の母よ，われらはあなたを讃える」

司祭：「あなたに栄光あれ，キリスト・われらの神よ，われらの希望よ，あなたに栄光あれ」

歌隊：「栄光は父と子と聖霊に．今もいつも世々としえに至るまで．アーメン．主よ，憐れみたまえ(×3)．祝福を与えたまえ」．

司祭：「キリスト，真なるわれらの神よ，〔あなたはわれら人類のため，またわれらの救いのために，恐るべき受難と，生命を与える十字架，自らなる埋葬を肉において受け取られた．〕いと聖なる神の母，聖生にして神の息吹を受けたわれらの師父たち，そしてすべての聖人たちの執り成しを通じて，われらを憐れみ救いたまえ，善性に満ち人を愛する方として」．

歌隊：「アーメン」．

司祭は閉祭の祝福を信徒に与え，こう述べる：

「主の祝福が，その恵みと人への愛とともにあなた方にあらんことを．今もいつも世々としえに」．

歌隊：「アーメン」．

3) 金口の聖ヨアンネス・クリュストモス典礼(復活の主日)

さて，第三番目のビザンティン典礼のタイプとして「金口の聖ヨハネ典礼」を顧みよう．本来，復活を寿ぐ聖体礼儀の典礼としては，クリュストモス典礼がそれに適わしいと認識されている．のバジル典礼と重複する部分も多いが，以下にクリュストモス典礼の全体を翻刻することにしよう．

助祭「人々があなたがたの善き行いを見て，あなたがたの天の父をほめ讃えるようになるために，あなたがたの光を人々の前に輝かせよ．今もいつも世々としえに」． 司教「主よ，主よ．天より見

そなわし、あなたのぶどう園をご覧あれ。これはあなたの御手が備えたもの。これを力づけたまえ。あなたの御目を、あなたが強めてこられた人の子らの上に常に注ぎたまえ」。会衆：スティヒラ（第6調）「キリスト、われらの救い主よ、あなたの復活を天使たちは天にて歌う。われらをも、地にてそれに適う者とせよ、われらは清き心もてあなたを歌い、讃えまつるがゆえに」（×2）

助祭「主よ、祝福を与えたまえ」 司教「父と子と聖霊の王国は、今もいつも世々とこしえに祝せられる」。会衆「アーメン」 司教：トロパール（第5調）「キリストは死者の中から復活し、死をもって死を打ち滅ぼし、墓の中にいる者たちに生命を賜った」 会衆はこのトロパールを2度繰り返して歌う。

続いて大連祷。

第1・第2 アンティフォン：「すべての大地よ、主に向かって喜べ！ その名に讃美を語れ。その誉れを栄光とせよ。神の母の祈りを通して、救い主よ、われらを救いたまえ。神よ、われらを憐れみ祝したまえ。その御顔をわれらに輝かせ、われらを憐れみたまえ。神の子よ、われらを救いたまえ。あなたは死者のうちから復活された方。われらはあなたに歌う、アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ」。

続いて「栄光は父と子と聖霊に。今もいつも世々とこしえに。アーメン」と唱えられると、皇帝ユスティニアヌス 世（在位 527 - 565）により挿入された句が歌われる。「神のひとり子にしてその御言葉、あなたは不死、われらの救いのため、聖なる神の母・とこしえに処女なるマリアより肉を受けることを肯われた。あなたは変わることなく人となり、十字架に架けられた、われらの神キリスト。あなたは死をもって死に打ち勝った、聖なる三位一体の一、父と聖霊とともに讃えられるべき方。われらを救いたまえ」。

この間に福音の到来を具現する「小聖入」が行われ、会衆は起立する。司教と司祭は福音書を捧げて祭壇を左回りに廻り、イコノスタスの北門から出て王門前のアンボンに至り、福音書に接吻した後高く挙げ「叡智、真なる信徒たちよ」と呼びかける。

司教「キリスト、真なる光、あなたはこの世に来たすべての人を照らす方。あなたの御顔の光がどうかわれらの上に注がれるように。われらがそこに近づきがたき光を認めることができるように。あなたの命を遂げることができるように、われらの歩みを導きたまえ。染みなきあなたの御母の祈りを通して。われらの救い主よ、われらを救いたまえ」。続いて歌唱の調子で「死者の中から復活された神の子よ、われらはあなたに向かって歌う。アレルヤ！」。

これに会衆は聖入歌「イスラエルの幹より出でた者たちよ、集いをなして主なる神を讃えよ」と応え、さらにトロパール（第5調）「キリストは死者の中から復活し、死をもって死を打ち滅ぼし、墓の中にいる者たちに生命を賜った」を歌う。「栄光は」「今も」に続き、コンターク（第8調）「不死なる方よ、あなたは墓までも降られたが、黄泉の支配を打ち砕かれた。そしてあなたは、神なるキリストよ、勝利者として復活し、香油を携える女たちにこう言われた、＜喜びなさい＞。そして使徒たちに平和を賜り、打ちひしがれていた者たちを蘇らせた」。司教「われらの神よ、あなたは聖なる方。父と子と聖霊よ、われらはあなたを讃える。今もいつも」 助祭「世々とこしえに」 会衆「アーメン」。

司教「キリストにおいて洗礼を受けた者は、キリストを着る者となった。アレルヤ」（ふだんは「聖なる神」）。会衆は同じ句を2度繰り返す。「栄光は」「今も」をはさみ、後半部分「キリストを着る者となった。アレルヤ」を繰り返したのち、再び「キリストにおいて洗礼を受けた者は、キリストを着る者となった。アレルヤ」と歌う。助祭「謹んで聞こう」 司教「あなたがたすべてに平安あれ」 助祭「叡智、謹んで聞こう」 プロキメン（第8調）「この日は神が創られた日。ともに喜び祝おう！」 会衆「ともに喜び祝おう！」（後半部の繰り返し） 助祭が「叡智！」 朗読者「聖～使徒～書の朗読」 助祭「謹んで聴こう！」 この日は「使徒行録」より第1区分、すなわち同書 1.1-8 の朗読であった。司教は朗読者に「あなたに平安」 助祭「叡智！謹んで聴こう！」 会衆「アレルヤ」（×3）〔助祭「主よ、聖×福音記者を告知する者を祝福したまえ」

ここに司教の「神が、誉れ高き聖×（使徒）福音記者のとりなしを通して、福音の告知者であるあ

なたに、力ある言葉を授けて下さるように、神の愛しき御子、キリスト・イエスの福音の告知のために」という言葉が挿入される。 助祭「叡智・真なる信徒たちよ、聖なる福音を聞こう」 司教「聖～による福音書の朗読」 会衆「主よ、あなたに栄光！」 助祭「謹んで聴こう！」

司教と助祭によりハンガリー語とギリシア語により「ヨハネ福音書」冒頭の朗読(1.1-17)が行われた。朗読が終わると会衆「あなたに栄光、主よ、あなたに栄光」。その後、説教が行われる。

説教が終わると「三重連禱」となる(バジル典礼を参照)。

続いて聖体礼儀の後半部分を構成する「信徒礼儀」に移り、会衆は「ケルビムの歌」を歌う。「われらはケルビムを神秘的にかたどり、生命を与える聖三位一体に、三度歌を捧げ、いまあらゆる世の思いを打ち棄てよう」。この間に、キリストの葬り・葬礼を表す「大聖入」が行われ、会衆は起立する。

助祭「真なる信もつキリスト教徒たちよ、主なる神がその国において、常にあなた方すべてのことを思い起こして下さるように。」今もいつも世々としえに」。司祭も同じ句を繰り返したのち、司教が「聖なる、われわれの首たる牧者～教皇、神を愛するわれらの～司教、全司祭団、全教会の組織、この聖なる家の幸いにして永遠に記憶さるべき創設者と善業者たち、そして、真なる信を持つキリスト教徒たちよ、あなた方すべてのことを、主なる神がその王国において常に思い起こして下さるように、今もいつも世々としえに」と唱え、会衆は「アーメン」と唱えたのち、ケルビムの歌の後半を歌う。「われらは万物の王を抱く、天使の群れが目に見えぬあり方で運ぶその方を。アレルヤ、アレルヤ、アレルヤ」。これに続き、司祭は「あなたの御一人子の憐れみにより、そのゆえにあなたは祝される、いと聖にして善性に満ち、生命を与えるあなたの霊とともに、今もいつも世々としえに」。会衆は「アーメン」。以下次のように「平和の接吻・挨拶」が続く。司教「あなた方皆に平和があらんことを」 会衆「あなたの霊にも」 助祭「われらが一致のうちに、告白できるよう、互いに愛し合おう」 会衆「父と子と聖霊を、一にして分かれざる聖三位一体を」 司祭「扉、扉！ 叡智のうちに身をつつしもう」。

ここで会衆は「使徒信条」を唱える。続いて助祭「憂いなく立ち、畏れをもって立ち、聖なる犠牲を平和のうちに捧げることができるよう、身をつつしもう」 会衆「平和の憐れみを、誉れの犠牲を」 司教「われらの主イエス・キリストの憐れみ、父なる神の愛、聖霊の交わりがあなた方皆さんとともに」 会衆「あなたの霊とも」。

ここから、聖体礼儀はその中核部を成す「アナフォラ」(奉献文)部に入る。司教「われらの心を挙げよう」 会衆「主に向けて挙げよう」 司教「主に感謝を捧げよう」 会衆「父と子と聖霊を、一にして分れざる聖三位一体を崇めることは、相応しく正しきこと」。

以下、クリュソストモス典礼より司祭(司教)の黙唱部も訳出する。(司祭は腕をひろげ、静かに次の祈りを読む)「あなたを讃え、あなたを寿ぎ、あなたを誉め歌い、あなたに感謝を捧げ、あなたの支配の場すべてにおいてあなたに跪拝することは、相応しく正しきこと。あなたは神、言葉に尽くせず、人の考えも及ばず、目に見えず、把握できず、常に在り、常に同一である方。それはあなたとあなたのひとり子、そしてあなたの聖なる霊。あなたは私たちを無から存在へと導き、倒れていた者たちを再び立ちあがらせ、すべてをなし遂げるまでは見捨て置かなかった。私たちを天に導き、来たるべきあなたの御国をたまわるまで。これらすべてのことのゆえに、私たちはあなたと、あなたのひとり子、そしてあなたの聖なる霊に感謝を捧げる。私たちが知りえたもの、知りえていないもの、私たちのものとなった目に見える恵み、見えざる恵みのゆえに。私たちはこの聖体礼儀のためにもあなたに感謝を捧げる。あなたはこれを、私たちの手から受け取るに値するものとされました。あなたの傍らには幾千の大天使、幾万の天使、ケルビム、セラフィム、六翼、多眼、宙舞、有翼の者たちが立ち、(司祭は声を挙げ、その間にディスコスにチツラグ(星)で十字を切る)「勝利の歌を歌い、叫び、呼ばわって述べる」。すると会衆は「勝利の歌」を歌う。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、天と地はあなたの栄光に満ち。いと高きところには栄光、主の名によりて来たる者は祝される、

いと高きところには栄光」。

続いて司祭は「主の晩餐の制定句」を唱える。(司祭は痛解し、パンとぶどう酒の聖変化、および聖なる犠牲を献げる意向について少しく思い起こす。そののち腕をひろげ静かに)「人への愛に満ちた主よ、われらもまた、これらの幸いなる諸権能とともに、叫びを上げて述べる。あなたは聖にして至聖なる方、そしてあなたのひとり子、あなたの聖なる霊も。あなたは聖にして至聖なる方、あなたの栄光は偉大。あなたは、御ひとり子を与えるまでにこの世を愛されました。それはそのひとり子を信ずる者がすべて、滅びに至ることなく永遠の生命を持つようになるためです。あなたは、私たちのための救いの歴史(経綸)をすべて成就させるために来られ、裏切られる夜、いな世のいのちのためにすすんで自らを裏切りに委ねられた夜」。(司祭は左手にディスクスを取り、聖パンとともに、少し捧げ持ち、静かに祈りを続ける)「聖にしてけがれも染みもなきその手でパンを取り、感謝を捧げ、祝福し、聖化し、割き、聖なる弟子の使徒たちに与えてこう言われました」。(声を挙げて)「取って、食べなさい。これはわたしの体、あなた方のため、罪の赦しのために裂かれるもの」 会衆は「アーメン」と応える。司祭は続ける。(深く身をかがめ、杯を覆い、静かに)「食事の後、杯も同じようにして、こう言われました」。(声を挙げて)「みなここから飲みなさい、これはわたしの血、新しい契約の血、あなた方と多くの人々のため、罪の赦しのために注がれるもの」 会衆は「アーメン」と応える。司祭は続ける。(深く身をかがめたのち、腕をひろげ、小声で)「いまわれらは、救い主のおきて、われらのために為されたすべてのこと、十字架、埋葬、三日目の復活、昇天、父の右への着座、栄光を帯びての再度の到来を思い起こす」 (司祭は右手にディスクスを、左手に杯を取り、両腕を交差させてその聖パン・聖杯をささげ持ち、こう宣べる)「われらはあなたのものをあなたのものからあなたに捧げる。われらすべてのため、すべてのもののために」。会衆は「われらの主よ、あなたをほめ歌い、あなたを祝し、あなたに感謝を捧げ、われらの神よ、あなたを崇める」と応える。

次いで司祭は「エピクレーシス」(聖霊降臨祈願)部に入る。(司祭は深く身をかがめ、腕をひろげ、静かに祈る)「さらに私たちは、あなたに向かってこの知と霊による奉仕を献げ、あなたを呼び求め、あなたに乞い願う。あなたの聖なる霊を、私たちと、ここに献げる捧げものの上にお遣わし下さい」。ここにスラブ起源による挿入句が入る。(司祭は助祭とともに、3度身をかがめ、その間に十字を切り、小声でこう祈る)「主よ、あなたのいと聖なる霊を、第3時にあなたの使徒たちの上に遣わした善き方よ、この霊をわれらから取り去らず、あなたに願い求めるわれらのうちに新たにして下さい」。司祭はこれを3度繰り返す間に、「神よ、わたしのうちに淨い心をつくり、わたしの内に直き霊を新たにして下さい」「あなたの御顔からわたしを遠ざけず、あなたの聖なる霊をわたしから取り去らないで下さい」との唱句を挿む。以下、聖霊による変容のための祈願が続く。(司祭は聖パンを祝福し、静かに唱える)「このパンを、あなたの子キリストの尊い体に」、(聖ぶどう酒を祝福し)「この杯のうちにあるものを、あなたの子キリストの尊い血に」、(両者をともに)「あなたの聖なる霊によって変容させてください」(改めて腕をひろげ、小声で祈る)「ここに与かる者たちに、靈魂の目覚め、罪の赦し、あなたの聖なる霊の共有、天の御国の成就が実現し、裁きや断罪ではなく、あなたとの自由な語らいが叶わんことを」。

続いて「聖人の記憶」部に入り、司祭は黙唱を続ける。「さらにあなたに、知によるこの奉仕を献げる。信仰のうちに眠りに就いた者たち、先祖、父祖、族長、預言者、使徒、告知者、福音記者、殉教者、証聖者、修道者、そして信仰のうちに生を全うしたすべての正しき霊のため」(司祭は聖パン・聖ぶどう酒に香を振り、その間に声を挙げて宣べる)「とりわけいと聖にして、いと浄らかな、いと祝せられし誉れあるわれらが王妃のため、神の母にして常世に処女なるマリアのため」 会衆「天使は恩寵満ち満てる方に叫ぶ。いと浄らかなにして聖なるおとめよ、喜べ。繰り返して言う、喜べ。あなたの子は三日目に墓より復活した。そして死せる者たちを復活させた。あなたがたはともに祝うがよい」。ふだんは「まことにふさわしきかな、神の母よ、あなたを讃えることは。いと幸いにして咎なき方、われらの神の御母よ、ケルビムよりも尊く、セラフィムよりも類いようもなく栄えある方、あなたは神を、御言葉を、陣痛なくお産みになった。真なる神の母よ、われらはあなたを誉め

歌う」。

続いて（助祭がいる場合には、歌の間に祭壇に香を振る。司祭は腕をひろげ、静かに祈る）「洗礼者にして預言者なる聖ヨハネと先駆者たちのため、聖にして栄えある、いとも誉れにみちた使徒たちのため、今日われらがその記憶を記念する聖～のため、またあなたの全聖人たちのため、彼らのとりなしによって恵み深くわれらをみそなわしたまえ、われらの神よ」。

次に「死者の追憶」に移る。司祭は「そして永遠なる生命への復活の希望のうちに亡くなった者たちを、すべて御心に留めたまえ」と唱え、亡くなった者をその意向・意思に従って思い起こす。（静かに唱える）「われらが主よ、亡くなったあなたの僕を御心に留めたまえ」、続いて腕をひろげ、祈りを続ける。「そして彼らを、あなたの御顔の光が輝く場所に憩わせたまえ」。

その後「生者の追憶」に移り、「主よ、われらは願う。真なる信仰を保ち、あなたの真理の御言葉をふさわしく教える全司教たち、全司祭たちを心に留めたまえ。キリストにおける司祭団を、教会の全組織を」。「さらにわたしたちはあなたに向かい、この知による奉仕を、全世界のため、聖にして普遍、使徒継承の教会のため、また清く浄らかな生のうちにその日々を送った人々のために献げる」。

（声を挙げて）司祭「まず初めに、われらの主よ、聖なる、われわれの首たる牧者～教皇、神を愛するわれらの～司教に御心を留めたまえ、そして彼らを聖なるあなたの教会で、平和、安寧、品位、健康そして長命のうちに、あなたの真理の言葉を相応しく述べ伝えられるよう、守りたまえ」。（会衆は次の黙祷が続く間にこう歌う）「光り輝け、天上のエルサレムよ。主の栄光があなたを覆った。さあ喜び祝うがよい、新しきシオンの山よ。浄らかなる神の母よ、喜びに満たされよ。あなたの子の復活のゆえに」。ふだんは「われらみなをも、みなのもをも」。

（歌の間に、司祭は生ける者をその意向・意思に従って思い起こし、そののち手を合わせ、静かに祈る）「われらの主よ、われらが住むこの町（共同体）、全ての町、共同体、村、そしてそこに住む信徒たちを御心に留めたまえ。われらの主よ、船に乗る者、旅する者、病める者、疲れし者、囚われし者らを、そして彼らの解放を心に留めたまえ。われらの主よ、あなたの聖なる教会に献げ物を携え、慈善をなし、貧しき者たちを助ける者たちを御心に留め、またわれらすべてにあなたの恵みを遣わしたまえ」。

（続いて声を挙げ）司教「そして一つの口、一つの心で、父と子と聖霊よ、われらがあなたのいとも尊く高貴なる名を讃え、ほめ歌うことの叶わんことを、今もいつも世々とこしえに」。そして会衆が「アーメン」と応じ、「アナフォラ」部は終了する。

続いて司祭は「われらの偉大なる神にして救い主、われらのイエス・キリストの恵みがあなた方皆さんとともに」と促し、会衆が「あなたの霊とも」と応え、以下「懇願連祷」が続く（バジル典礼を参照）。

ここで会衆は「主の祈り」を唱える。司祭はこれを承け「国と力と栄光は、父と子と聖霊よ、あなたのもの、今もいつも世々とこしえに」と応じ、会衆は「アーメン」と結ぶ。続けて、司祭「あなたがたすべてに平安があるように」。会衆「あなたの霊にも」。司祭「主に頭を垂れよう」。会衆「主よ、あなたに」。司祭「あなたの御一人子の恵み、憐れみ、人への愛を通して、あなたはその故に祝せられる、いとも聖にして善き方、生命を与えるあなたの霊とともに、今もいつも世々とこしえに」。会衆「アーメン」。司祭「身を謹もう。聖なるものは聖なる者に」。会衆「聖なるものは一、主は一、イエス・キリスト、父なる神の栄光のために。アーメン」。

会衆はここで「聖体拝領前の唱句」を唱える（バジル典礼を参照）。

この唱句に続き、当日の「拝領唱」が歌われる。

続いて司祭（助祭）の「キリストの体を受け、不死性の泉を味わうがよい。アレルヤ！」（ふだんは「神への恐れと信と愛をもって近づくがよい」との呼びかけに、会衆「キリストは死者の中から復活し、死をもって死を打ち滅ぼし、墓の中にいる者たちに生命を賜った」。ふだんは「主の名によりて来たる者は祝される。われらに現れた主こそ神」と歌い、聖体拝領の行列となる）。

拝領が終わると司祭は「神よ、あなたの民を救い、あなたが遺されたものを祝福したまえ」と『詩篇』二七九を唱える。これに会衆は「わが主よ、幾とせにもわたって！」と応じてから「キリストは死者の中から復活し、死をもって死を打ち滅ぼし、墓の中にいる者たちに生命を賜った」。ふだんは「われらは真の光を見た。天の聖なる霊を受けた。真の信仰を見出した。分かれざる聖三位一体を崇めよう。彼こそわれらを救われた方」と歌う。なお聖体は、酵母入りのパンをぶどう酒に浸したものである。

司祭は「(われらの神は祝せられる,)永遠の昔より今もいつも世々としえに」と唱え、会衆は「アーメン」と応じてから「キリストは死者の中から復活し、死をもって死を打ち滅ぼし、墓の中にいる者たちに生命を賜った」。ふだんは「われらの唇があなたへの讃辞で満ちんことを、あなたの栄光を歌わんがために。あなたはわれらが、不死にして生命を与え聖なる天上の神秘に与ることを許された。あなたの秘跡により、われらを強めたまえ。この一日、あなたの真理を観想することができるように」と歌う。

以下、「感謝連祷」である(バジル典礼を参照)。

ここから「閉祭」の部に入る。末尾の部分がバジル典礼とは異なる。司祭(主日)「死者のうちより復活したキリスト、真なるわれらの神が、そのいとも浄らかなる母、誉れあり万物にまさって讃えられるべき使徒たち、コンスタンティノポリスの首たる司教金口の聖ヨハネ、聖にして神の靈感を受けたわれらの師父たち、それにすべての聖人たちのとりなしにより、われらを憐れみ、われらをお救い下さるように、善き方にして人を愛する神なれば」。会衆「アーメン」。

司祭「キリストは復活された」 信徒「まことに復活された」(×3)

司祭「主の祝福が、その恵みと人への愛とともにあなた方の上にあらんことを。今もいつも世々としえに」 会衆「アーメン」。

第2節 ビザンティン典礼による聖体礼儀と聖書神学

1 はじめに

では以降、その歴史性に鑑みて、聖バジル典礼の式次第に依りつつ聖体礼儀の神学的地平を考察することにしよう。まず「序」でも一部指摘した点であるが、ビザンティン典礼における「使徒信条」の位置に注目してみたい。「使徒信条」は、言葉のレベルに属するものであって秘跡とは一線を画す、という捉え方がありうる一方、これは信徒のみが唱えうる事項である、という理解ができる。ビザンティン典礼はこのうち後者の立場を取り、ローマ典礼が前者の立場を取るのと対照的である。こうしてビザンティン典礼は、信徒・非信徒を区別し、信徒のための秘儀の場を頂点としながらも、当初より両者の存在を前提とすることによって、世界を包容しうる性格を有している。逆にローマ典礼は、信徒が唱えるべき「使徒信条」(主日祝日のみ)が前半部に来てしまうために、そもそもその全体が信徒向けに構成されたものである、と考えられるであろう。ビザンティン典礼の旧来の典文では、非信徒に退出を要請するが、これは今日では、非信徒に対し「信条の告白を強要しないため」だと理解する¹⁸。西洋世界ならともかく、真に世界に普遍的な典礼様式を模索する上では、ビザンティン典礼のほうが柔軟性に富む、と考えられよう。

ローマ典礼は、1962年から65年にかけて行われた第2ヴァチカン公会議の重要課題であった典礼改革の結果、大幅な改変が加えられ、それ以降、旧来のローマ典礼文は事実上姿を消したといえる。この改革の背景には、聖書学の興隆と新教諸派への顧慮があり、それまでのローマ典礼が人々の「真の集いの場」としては機能しえなくなっていたことが推察される。もっとも、それ以降のローマ典礼教会の展開を見ても、典礼と並んで聖書研究を集いの場とするなどの傾向がごく一般に行われていて、

¹⁸ この点については、拙稿“Görög Patrológia Jelentősége és Lehetősége Japánban önéletrajzi emlékirat”, *Athanasiana* 22, 91-107, Szent Atanáz Görög Katolikus Hittudományi Főiskola, Nyíregyháza, Hungary 2006, 106. o. を参照。

この方向はむしろ推奨されていると言えるのかもしれない。もっとも、聖書研究は確かに重要ではあるが、典礼に秘められた無比の価値、すなわち秘跡的体験は、何物にも代えがたいものであろう。

この点に関して、ビザンティン典礼は典礼改革を経験することなく、第2ヴァティカン公会議では母国語使用が認められたという大きな進展はあったものの¹⁹、初代教会以来の形式をほぼそのままの形で現在に継承している。ビザンティン典礼の典文を「集いの場」として取り上げようとする場合、まず、ローマ典礼が顧慮することになった「聖書」の言葉と思想が、どのような形で典文のうちに取り込まれているかを考えてみる必要があるだろう。

ビザンティン典礼の聖体礼儀にあつては、第2部が「求道者礼儀」、第3部が「信徒礼儀」と名づけられ、あわせて基本的に前者は「言葉」のレベルでのイエスの福音宣教活動を、後者はイエスによる聖体の秘跡の制定を寿ぎ記念する構造になっている。かくして当初よりビザンティン典礼にあつては、聖書の「言葉」そのものは秘跡的次元に譲るものと認識されている。もっとも秘跡的次元を表現する文面も、結局は聖書の表現を基盤に記されているため、両者は交じり合うことになる。

では、聖バジル典礼の「アナフォラ」部を中心に考察を始めることにしよう。ここには長大かつ救済史的な奉献文が見出され、聖バジルによる、人々の「一致」を願う熱い想いが顕著である²⁰。このアナフォラ部に「聖体制定句」と「エピクレシス」がともに定められているという点は、かねてよりローマ教会側からの批判の対象となってきた。最後の晩餐におけるイエス自身の言葉によって、奉献物のパンは聖変化をこうむる。そのパンに対してあらためて聖霊の降臨を願うことは不敬に当たるのではないか、というのがこの批判の趣旨である。この点をめぐってはすでに「旧稿」で議論を尽くしたので詳細を繰り返すことはせず²¹、ここではただ筆者の主張の要点のみを再録するに留める。

ビザンティン典礼における奉献物は、一旦「聖体制定句」により聖化を受けるが、これは「最後の晩餐」のかたどりでである。それに対して聖霊の降臨を祈願することは、イエスが死・復活・昇天を経たのち、弟子たちの上に聖霊が降臨したことを想起させると思われる。その際、「聖体制定句」と「エピクレシス」の間に同一のパン＝聖体が現存するため、奉献物は「キリストの復活体」たる「使徒共同体」と化す。「聖体制定句」と「エピクレシス」間の「アナムネシス」部には、「神であり父であるあなたの右の座からの、栄光を帯びての威厳ある到来を想起」する旨の句があり、これはエピクレシスにおける聖霊降臨の祈願が、単に事象としての聖霊降臨を記念するだけでなく、終末論的時点における霊の到来を祈願する祈りとなっていることを表している²²。

2 『使徒行録』との関連

本稿ではこれ以降、聖書の記述との関連でビザンティン典礼の地平を考えてゆきたい²³。まず「使徒行録」第2章では、使徒たちへの「聖霊降臨」のさまが語られている。そこでは「炎のような舌」のかたちを取った聖霊が、使徒たち各人の上に分かれて降り注ぎ、使徒たちはさまざまな言語の能力を与えられて「異言を語りはじめた」とされる(2.3-4)。これを見て「2.7 人々は驚き、驚嘆してこう言った。<ここで語っている者たちは皆、ガリラヤの者たちではないのか。8 どうしてわれわれは各々、われわれが生まれた場所に固有の地方語で、それを耳にするのだろう。9 パルティア、メディア、エラムの人々もいれば、メソポタミア、ユダヤ、カッパドキア、ポントスやアジア、10 フリュギアにパ

¹⁹ この点に関しては、拙稿「伝承と国際性 ハンガリーのギリシア・カトリック教会」(筑波大学比較文化学類『比較文化研究』第3号、26-36、2007)および「スロヴァキアの春 『東方教会法典』の規定と現代の「殉教者」たち」(同『比較文化研究』第4号、49-65、2008)を参照。

²⁰ 前掲注(6)拙稿「聖バジル典礼における奉献文の神学的地平」、58頁を参照。

²¹ 同上拙稿、55-57頁を参照。

²² J. Meyendorff, *Byzantine Theology*, New York 1983, 201-211。

²³ 以下ギリシア語聖書本文の引用は K. Aland et alii (ed.), *The Greek New Testament*, 3rd ed. United Bible Societies, 1975 に基づく。

ンフェリア、エジプトや、キュレネのリビュア地方に住む人々もいる。滞在中のローマ人もいれば、11 ユダヤ人や改宗者たち、クレタ人やアラビア人もいる。彼らがわれわれの言葉で、神の偉大さを語っているのを耳にしようとは> .12 そして人々は驚き、当惑して互いに言い合った。<いったいこれは、どういう意味なのだろう？> 13 だが他の者は<彼らは新しい酒に酔っているのだ>と語っていた」とされる。

このうち、9~10 節の民族名は、東から西に並んでいることが指摘されている。また、ローマ帝国にとって最大の敵であったパルティアに始まり、13 番目のローマで終わっていて、途中の「ユダヤ」は後世の書き入れであるとする説もあり、そうすれば 12 の地名は使徒の数、あるいは伝統的なイスラエル・ユダの 12 部族の数として、これは世界の全体を表すものと捉えられよう。さらに 11 節の「ユダヤ人や改宗者たち」は、9 - 10 節に出るすべての民族に適用されるため、この表現は別の分類による「世界」の提示である、とも捉えられよう²⁴。

ペトロは人々による「使徒酩酊説」を否定し、これが預言者ヨエルによる預言の成就であると説く。「(ペトロは言った), 2.16 これは預言者ヨエルによって語られたことである。(その預言とは、以下のようなものである。) <17 終わりの日に臨み>, 神は言われる、<私はわが霊をすべての人に注ぐ、するとあなた方の息子たち、あなた方の娘たちは預言するであろう。あなた方の若者らは幻を目にし、あなた方の長老らは夢のうちに夢見るであろう。18 わたしはわが奴隷たち、わが奴隷女たちにも、かの日にはわが霊を注ぐ。すると、彼らは預言するであろう> .19 また<私は上なる天に予兆を与え、下なる地には徴を、血、火、そして雲の柱を示そう>」。

ここで著者であるルカは、ペトロが「ヨエル書」の 3 章 1 節~5 節(七〇人訳の章節による)を引用しつつ説教することで、この聖霊降臨の現象を「ヨエル書」における<終わりの日>をめぐる預言の成就である、とペトロが解釈したことを告げている。それに加えてルカは、聖霊降臨の現場を目撃した人々が、ローマ帝国のあらゆる地方から集った者たちであることを記す。かくして「使徒行録」のテキストからは、「聖霊降臨」という現象が「終わりの日」をめぐる預言の成就として起こり、このことは「すべての人々」によって証言された、という理解を読み取ることができよう。

人々はペトロの説教を聞き、心を強く打たれる。「2.37 人々は、ペトロおよびその他の使徒たちに言った。<兄弟たちよ、わたしたちはどうすればよいのですか> .38 そこでペトロは彼らに対し、<回心し、あなた方各々があなた方の罪の赦しのために、キリスト・イエスの名において洗礼を授かるがよい。そうすれば聖霊の賜物を受けるであろう>」。さらに続く「使徒行録」第 3 章でもペトロは同様の文脈で説教をする。「3.19 回心し、あなたがたの罪が拭い去られるように立ち返れ。20 そうすれば主の御顔からの慰めの時が来て、主は、あなたがたのために定められたキリスト、イエスを遣わす。21 このイエスは、神が代々にわたり、聖なる預言者たちの口を通して語った<万物一新(apokatastasis pantón)の時>まで、天が留めねばならない」。

この 3.21 に「アポカタスタシス」という語彙が現れる。これは「普遍的救済」「万物刷新」などと訳される神学的概念である。この語彙は、4 世紀から 6 世紀さらには後世にかけてのオリゲネス主義の展開の中で、「終末においては悪魔も救われる」とする、バイアスのかかったオリゲネス主義の一主張を表すものとなり、これは謬説として、553 年の公会議において異端となり断罪される²⁵。しかしこの「使徒行録」の用例では、ペトロがそこまでの文脈でこの語彙を用いているとは考えられない。

この apokatastasis (3.21) と同根語である「復興する」apokathistanein という動詞が、遡って「使徒行録」第 1 章に用いられている。「1.3 イエスは弟子たちに対し、受難ののち、多くのしるしのうちに自らの生ける姿を示し、四〇日間にわたって彼らに現れ、神の御国について語った。4 そして彼らとともに食事をしていたとき、彼らに対し<エルサレムを離れず、あなた方がわたしから聞いた父の

²⁴ 以上に関しては、フランススコ会聖書研究所訳注『使徒行録』(中央出版社、1969 年)、37 頁注(7)(8)。

²⁵ 以上の次第に関しては、小高毅『オリゲネス』(創文社、1984 年)。

教えに留まるように、ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなた方は遠からず、聖霊のうちに洗礼を授けられることになるだろう>と言った。6 集っていた者たちは、イエスに<主よ、そのとき、イスラエルに王国を復興なさる apokathistaneis のですか>と尋ねた。7 するとイエスは彼らに対し、<父が自らの権能において定めた時や時機を知ることは、あなた方にできることではない。8 むしろ聖霊があなたがたの上に降るとき、あなたがたは力を得て、エルサレムとユダヤおよびサマリアの全土、そして地の果てに到るまで、わたしの証人となるだろう>と言った。

イエスは弟子たちの質問に直接答えることはしないが、イスラエルにおける王国の復興と、イエスの予言の通り実現した聖霊の降臨とは、密接な関係を持つことが推察される。実際上述のように、聖霊降臨の事象を目撃しその証人となったのは、ローマ帝国内のすべての領域からエルサレムに上ってきていた人々であった(「使徒行録」2.7-11)。

ここでビザンティン典礼文の側に目を転じよう。クリュソストモス典礼をも含め、バジル典礼を初めとしてビザンティン典礼文には聖体制定句とエピクレシスがあるために、まず信徒にとっては、聖体制定句において、自らの食す聖体の聖性が保証されることになる²⁶。一方非信徒の退出が不必要であるとすれば、彼ら非信徒は、聖体制定句からエピクレシスまでの経過を、ひとまず「最後の晩餐」から「聖霊降臨」までの、歴史的事実の再現として捉えることができる。さらにこの霊の降臨とは、終末時におけるキリストの再臨に重ねあわされたものであった。かくして典礼中のこの箇所に参加するものは、信徒・非信徒を問わず、キリストの受難から聖霊降臨=終末に至るまでの歴史経過を生きる者、となる。つまり式文構造の中に歴史性が確保され、その歴史は現代を通過するものであるために、すべての人にとって、そこに「与かる」ことが可能となるのである。

もとより「最後の晩餐」はイエスが自らの弟子たちとのみ行った、閉鎖的な空間であった。これに対して聖霊降臨の際には、およそ地上のすべての人々がその経過と次第を目撃した、とされている。ビザンティン典礼は、このような「開放的空間」としての聖霊降臨の次第をも十全に聖体礼儀のうちに取り込み、「見る」者を証言者として変容させる構造を蔵しているのである。

3 『ヨハネ文書』への展開

ところでビザンティン典礼では、聖バジル典礼に限らず、クリュソストモス典礼にあっても、信徒たちとともに公的に行われる「求道者礼儀」「信徒礼儀」の前に、司祭の執行による「奉献礼儀」が置かれている。「奉献礼儀」の中では、司祭により「彼の生命は地上から取り去られる」(使徒行録 8.32-33)との句とともに聖パンが捧げられ、「世の罪を除く神の小羊は、世の生命と救いのため、生贄とされる」という「ヨハネ福音書」(1.29)の句が唱えられる。その後十字架の右上側に「槍」で一突きが加えられ「兵士の一人が槍で彼のわき腹を開いた」と述べられる。これと同時に、祝福されたぶどう酒、および祝福を受けた水が順に聖杯に注がれて「すると直ちにそこから、血と」、「水が流れ出た。これを見た者がこのことを証ししており、その証しは真実である」という同福音書第 19 章 34-35 節の出来事が象られる。

「ヨハネ福音書」第 19 章の原文を顧みてみよう。「19.31 一方ユダヤ人たちは、その日が準備の日であったために、安息日に十字架上に遺骸が残っていないようにするために」というのもその日は安息日で大祭の日であった。彼らの手足を折り、十字架から取り下ろすことをピラトに願い出た。32 兵士たちが来て、最初の者と、彼とともに十字架刑に処せられていたもう一人の者の手足を折った。33 イエスのところまで来てみると、彼がもう死んでいるのがわかったので、その手足は折らなかった。34 一人の兵士が槍で彼のわき腹を突き刺すと、ただちに血と水とが流れ出た。35 これを見たものが証言しており、彼の証言は真実である。彼は、自らが真実を語るのは、あなた方も信じるようになるためだということを理解している。36 これらのことが起こったのは、<彼の骨は砕かれることはない>(出

²⁶ 拙稿”Soteriological Dimension in the Anaphora of the Liturgy of St. Basil in Light of the Eschatology of St. Gregory of Nyssa”, *Folia Athanasiana* 8 (2006), 97-112, 2007; esp. pp. 106 - 107 を参照。

エジプト 12.46) という聖書の言葉が成就するためである。37 また別の箇所では「彼らは、自分たちが突き刺した者を見るであろう」(ゼカリヤ 12.10)とも述べている。

一方「ヨハネ福音書」のうちに数えられる「ヨハネによる黙示録」第1章には「1.7 見よ、彼は雲に乗ってやって来る。すべての眼は、彼を突き刺した者たちも含めて、彼を見る。地のすべての民は、彼のゆえに嘆く」という一節があり、十字架上のイエスが「突き刺す」という行為を受けたという認識が受け継がれている。「黙示録」中のこの一節は、前半は「ダニエル書」7.13、後半は「ゼカリヤ書」12.10に基づき、イエスが王としてまたメシアとして、栄光に包まれて再臨することを宣言したものである²⁷。一方「ヨハネ福音書」19.37は、上掲のようにやはりゼカリヤ書のこの箇所、<すべての眼は、彼を突き刺した者たちも含めて、彼を見るであろう>に基づいているが、これは「終末における神の民の回心と神の恵みについて歌ったものである」とされる²⁸。

次に「ゼカリヤ書」第12章には「10 わたしはダビデの家とエルサレムに住む人々の上に恵みと憐れみの霊を注ぐ。彼らは、彼ら自身が突き刺したものである私に眼を注ぐ」とある。このような「神が終末時にその霊を注ぐ」場合としては、他にヨエル 3.1 が挙げられよう。そしてこの「ヨエル書」第3章は、上掲したように「使徒行録」のペトロによる説教において、聖霊の降臨が終末時の予言の成就として捉えられていることを示す論拠として引かれる箇所なのである。

このような形で「奉献礼儀」には、ヨハネが記録する「十字架上で、イエスの脇腹からの血と水の流出」という奇跡が取り込まれている。「最後の晩餐」ではパンとぶどう酒を「わが体」「わが血」としたキリストであり、信徒礼儀ではこれが「聖体制定句」として繰り返されるのであるが、奉献礼儀では、ヨハネ福音書における「血と水の流出」という現象が再現され、これが聖体の準備へと取り込まれている。そして、聖体としてのぶどう酒の準備に際しては、伝統的に、一滴のみ注がれる水が彼の人性を表し、一方ぶどう酒はキリストの神性を表すもの、と解される。

これまでの考察をまとめると、ビザンティン典礼では、奉献礼儀で「ヨハネ福音書」に基づいて準備されたキリストの体＝聖体が、聖体制定句によって最後の晩餐の時点に現在化され、さらにエピクレシスにより聖霊降臨へと移行してキリストの復活体＝使徒共同体へと変容するとともに、

これは終末の象りとなる、というプロセスが辿られている。十字架上のキリストのわき腹から血と水がほとばしることは、教父たちによれば、キリストと同一実体なる生ける聖霊の発出、すなわち秘跡の制定を表すものと理解されている。すると、奉献礼儀においていち早くこの定式に基づいて聖体が準備されることは、復活体としての十字架上のキリストが、最後の晩餐を主宰し、その同一実体が使徒共同体へと受け継がれる、という第3部の地平を準備するものとなる。つまりビザンティン典礼とは、すでに開祭の時点において、「最後の晩餐」を再現記憶して「キリストの死と復活を想い起こし語り継ぐ」というだけのものではない、ということが明らかとなる。むしろそこには、使徒共同体としてキリストの体を受け継いだ共同体が、実は現在も十字架上であって「槍で刺し貫かれ」「血と水とをほとばしらせる」生きた実体である、ということを示す構造が秘められているのである²⁹。

上に引いた「ヨハネ福音書」の第19章は、「証し」「真実」「信じる」といった表現をめぐり、いささか繰り返しが多すぎこちない表現になっているように思われる。だがここには、自らを「絶えざる苦難」(＝突き刺し)に身を晒しつつ、なお「証し」のために「霊の注ぎ」を繰り返す共同体として措定する構造を見出すことができる。こうして、奉献礼儀においてすでに「聖パン」がキリストの体として奉献され、キリストの復活体として措定されることにより、言葉を通しての「宣教の時期」に同定される第2部「求道者礼儀」は、「聖書」の言葉が現在に生きるべく賦活化される道として拓かれて

²⁷ フランシスコ会聖書研究所訳注『ヨハネの黙示録』(中央出版社、1972年)、29頁注(11)。

²⁸ フランシスコ会聖書研究所訳注『ヨハネによる福音書』(中央出版社、改訂新版1989年)237頁注(25)。

²⁹ 「血と水のほとばしり」が「霊の注ぎ」と解されることについては、宮本久雄「他者との想起的出会いと pneuma 言語 ヨハネの言語宇宙から」(『福音書の言語宇宙』第二部169～277頁所収、岩波書店、1999年)、193および251頁。

いると言えるだろう。

ところで「槍でパンを刺す」という、元来一兵士によるものであった行為が、奉献礼儀では司祭によって再現されていることが疑問点として残るかもしれない。まず前提としておかねばならないのは、かの一兵士による辱めは、19章33節の記述からも理解されるように、殺戮行為そのものではなく、遺骸への一凌辱行為であったという点である。もっとも槍の一突きによって遺骸から「血と水」とが迸ったという結果から逆に推察すれば、この時点でイエスは絶命していなかったとも考えられよう。ともあれこの兵士による辱めの行為は、結果的にキリストの生命性と、キリストからの霊の注ぎを証しする行為として意義づけられる。さらにこの兵士による一行為が、むしろその証し性のゆえにかけがえのないものであったと理解されていることは、これが司祭によって象られているという点からもわかる。かくして一兵士による凌辱行為は、共同体における証しの行為として取り込まれ、十全に止揚される。この意味でビザンティン典礼は、人類のすべてを共同体として包括する構造を、その内部に取り込んだ普遍救済論(アポカスタシス)的地平に立つものだと言えよう³⁰。この「普遍救済論」がビザンティン典礼の基礎的霊性をなしていることに関しては、すでに前節で「使徒行録」に沿って確認したところと合致する。

ギリシア・カトリック教会では、しばしばイコノスタシスが取り払われ、連禱の際に不可欠な聖母子のイコンと「教師キリスト」のイコンとが、祭壇のそれぞれ左右に立つだけの至聖所前景を見かけることがある。この構造は、至聖所の左角に置かれた奉献台での「奉献礼儀」が公開されることで、会衆一般にとって、先の「霊の注ぎ」を「見る」ことができるという結果を招く³¹。聖体に与ることができるのは信徒に限られるものの、第3部「信徒礼儀」より非信徒を排除しないという新しい方針は、エピクレシスすなわち聖霊降臨を「見る」ことができる者を一般レベルへと増し、もとより奉献礼儀すなわち共同体による赦しの表現を「見る」ことができる者をも増すという結果をもたらすことになる³²。

4 『ヨハネ福音書』における聖体論との関連

再び「ヨハネ福音書」に戻ろう。「ヨハネ福音書」には、最後の晩餐に関する記事が見当たらず、代わって受難の前日である木曜日に、イエスが自ら弟子たちの足を洗ったことを記録し、仕え合いの精神を伝えたとする。聖体に関しては、代わって同福音書第6章に記されている。ではそこに認められる「ヨハネ福音書」の聖体論と、本稿でこれまでに得られた方向性とは一致するだろうか。

「ヨハネ福音書」第6章を見てみよう。「6.53 人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなた方は自らのうちに生命を持たない。54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の生命を持ち、わたしはその人を終わりの日に復活させる。55 わたしの肉は真の食物であり、わたしの血は真の飲み物だからである。56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちに留まり、わたしもその人のうちに留まる」。

上に引いた一節で注目されるのは「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者」が「終わりの日に復活」する、という主張である。その者は「永遠の生命を得る」とも述べられている。これは「ヨハネ福音書」における聖体論と終末論の接点として位置づけられるであろう。本稿では、ビザンティン典礼にあって、奉献礼儀において聖化された奉献物としてのパンが、すでに使徒継承の共同体を体現するものとなっていることを指摘した。ビザンティン典礼は、この聖体に与かる者を共同体の構成員と規定し、かつその奉献礼儀をも公開することで、一般の人々がそれを「見る」ことにより、そこに「与

³⁰ アポカスタシス的世界観について、基礎的には拙著『教父と古典解釈 予型論の射程』(創文社、2001)を参照。

³¹ ハンガリー・ニーレジハーザの司教座聖堂がこのよい例である。

³² 「ヨハネ福音書」における「見る」ことの意味については、伊吹雄「ヨハネ福音書における信仰」(G.ネラン編『信ずること』97-141頁所収、新教出版社、1974年)。

かる」よう招くという方向性を有する。さらに前節で見たように、元来一兵士による凌辱の行為であった「槍の一刺し」は、証しの行為として止揚され、共同体の中に取り込まれていた。復活の生命を宿す真の共同体に対し、これをまず「見る」立場でその外に立つ者が、その共同体の内部へと取り込まれてゆくプロセスは、「使徒行録」でも確認しえた「救い」のプロセスであった。この「救い」の継続性・拓けは、歴史の展開を引き起こす機動力であるとも理解できよう。

かくして「終わりの日」とは、茫然と予期される「世の終わり」ではなく、一面では聖霊降臨の時点ですでに到来しているものであり、同時に現在展開中の歴史の果てに設定されるべき終結点・目標点なのである。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者」が「永遠の生命を得る」という表現は、その人がキリストと同じ立場に立ちうるものと解する以外には、理解が困難であろう。ビザンティン典礼ではこの面に関して、「私の体」として規定された聖体が、聖霊の降臨を受ける使徒共同体と同一であり、かつその聖体とは外界からの辱めをも十全に止揚して「救い」の歴史を刻んでゆく生命体として提示されるものなのである。この点は「イエスの脇腹からほとばしる血と水」に即して、前節で確認しえた点であった。このことは、同福音書の次章すなわち第7章でも次のように述べられている。「7.37 祭りの終わりの重要な日にイエスは立ち、叫んで言った。＜乾くものは誰であれ、わたしの許に来て飲むがよい。38 わたしを信じる者は、聖書に記されているとおり「そのはらわたからは、生ける水が流れ出る」(イザヤ 58.11)＞。39 これは、イエスを信じる者たちが受けることになる霊について述べたものである。イエスはまだ栄光を受けていなかったため、まだ霊が存在していなかったのである」。

上に引いた一節は、ビザンティン典礼では聖霊降臨の日に朗読される箇所である³³。ビザンティン典礼のうち、復活祭から聖霊降臨までの五〇日間は、年間のうちでも最高度に重要な期間であり、この間の祭日は、ほぼ「ヨハネ福音書」の登場人物を名にした祝日が続く。その次第は「トマスの主日」(第20章24-29節;第2週)、「油を携える女性の主日」(朗読は共観福音書から、ヨハネでは第20章;第3週)、「生まれつき足の不自由な人の癒しの主日」(第5章,第4週)、「サマリアの女性の主日」(第4章,第5週)、「盲目に生まれついた男性の癒しの主日」(第9章,第6週)となる。また第7週は「第一ニケア公会議の師父たちの記念の主日」であるが、聖書朗読箇所としては「ヨハネ福音書」から「イエスの司祭的祈り」とされる第17章が取り上げられる。そして第8週の「聖霊降臨の主日」には、朗読箇所として、上掲の「ヨハネ福音書」第7章32-52節および第8章12節が選ばれるのである。

そもそも聖霊降臨祭は、ユダヤ教の七週祭〔五旬祭・刈入祭;「シャブオット」〕を継承したものであり、七週祭はスィバンの月(第3月,今の5-6月)の6日目に祝われる(『出エジプト記』23.16;34.22;『レビ記』23.15-21;『民数記』28.26-31;『申命記』16.9-12参照)。この祭では、小麦粉に種を入れて焼いた常用食のパンが奉獻され³⁴、モーセがシナイ山上で神から律法を授かったことを記念し、共同体の成立が祝される。これが「聖霊降臨祭」としてキリスト教初代教会に継承された。ビザンティン典礼は、年間の主日を一貫して「聖霊降臨後第×主日」という形で計日するが、これは、共同体が聖なるパンを構成する生命体として持続することを如実に表現したものであるという見方もできるであろう。

結．ビザンティン典礼による聖体礼儀が伝えるもの

「ヨハネ福音書」は、復活後のイエスの視点から記されたとされる。そして復活の寿ぎを基調とする聖体礼儀には、朗読箇所としても同福音書が相応しいと言えよう。ビザンティン典礼では、復活祭

³³ ビザンティン典礼の聖書朗読箇所については、*Újszövetségi Szentírás: Görög eredetiből fordította és magyarázta P. Békés Gellért és P. Dalos Patrik, Pannonhalma 1994, 646-669.*

³⁴ フランシスコ会聖書研究所訳注『レビ記』(中央出版社,1959年),133頁注(5)。

から聖霊降臨祭までの期間中、週日の聖体礼儀において「ヨハネ福音書」が順次朗読され、全編に及ぶ。本稿で扱った聖バジル典礼は受難節中に読まれるものでもあるが、本稿ではあくまで「聖体礼儀」を復活の寿ぎの基本構造と捉え、そのテキストとして、歴史性の濃いバジル典礼を参照してきた。おそらくはバジル典礼の長大さが、特に信徒側からすれば「受難節中における復活の寿ぎ」に適わしいと判断されたものと推測されよう。

本稿で確認しえたように、ビザンティン典礼では、世からの辱めに絶えず身を晒しながらも、その行為を共同体内部のものへと浄化/止揚してゆく構造を内包している。このことは、信徒により拝受される聖体の聖性を保持しつつ、その外に置かれる存在を常に「証言者」として救いの歴史に巻き込み、共同体に取り込んでゆく「二段階のダイナミズム」として総括することができるであろう。

ビザンティン典礼は、その暦の構造をも含めて「ヨハネ的霊性」に基づいたものであるということがしばしば指摘される。暦日構造に関して言えば、ローマ典礼が復活祭と降誕祭の二極構造で構成されているのに対し、ビザンティン典礼は復活祭を一極とする構造であって、通常の間年期は「聖霊降臨後第×主日」として規定される。これは言うまでもなく、キリストの復活とそれに伴う使徒共同体への聖霊降臨までの期間を特別期とし、遡っては受難節を規定しつつ、それ以外の時期は聖霊降臨後の時期として意識されていることの表れである。

本稿では、このようなビザンティン典礼の「ヨハネ的霊性」を、聖体礼儀のテキストに沿って順に確認するという経過を辿ってきた。ビザンティン典礼では、「信徒礼儀」中の「聖体制定句」から「エピクレシス」までの間に、キリストの受難・死・復活から終末における再臨までを取り込む構造をまず有していた。と同時に使徒共同体＝聖体とは、そもそも「奉献礼儀」において、万人が「見る」ことにより証人として与かり得る「ヨハネ福音書」の「血と水とのほとばしり」の記事に基づいた奉献行為にのっとり形成されたものであった。この「脇腹への一刺し」という凌辱行為さえも、共同体の一行為として取り込まれる普遍的救済論がそこには認められた。

こうして「普遍的救済論」を秘めたビザンティン典礼は、その中心に真の十字架を抱くことで、普遍的集いのためのテキストとして十分にその有効性を発揮するものと考えられる。この十字架とは「言葉」のレベルを賦活化するものであり、かつ、生者と物故者とをあわせ記憶する共同体の中央に位置するものであった。過去・現在における文化的実りの研究に携わる人文諸科学にあって、その成果が十全に生命性を宿したものとなるために、このような形でその中央に十字架を抱くことは一つの積極的な姿勢となりうる。このような様々なレベルでのダイナミズムを秘めたビザンティン典礼の聖体礼儀テキストこそ、人類の普遍的な救済を祈念しかつそれを先取りして示す典礼構造として、地域差を越えて提示されるべき第一の礎だと考えたい。